

Chaos Garden

藤原久四郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

……やあ、御客人。大したおもてなしは出来ないが、どうかゆっくりしていったほしいな。……何、ここがどこかだつて？ そんな事は大した問題じゃないから、それよりも見ていってほしいモノがあるんだ。

私のオススメする……そうだな、これは君たちの……そう、随分身近な所での出来事だ。あり得ないなんてことはないし、あり得るとも言えない。だがきつと、いつだつて君の傍にだつて起こりうることだ。……ん、君は誰かだつて？ さあ、君の友達かもしれないし、君の親かもしれないし、君とは関係のない他人かもしれないな。

さあさあ、覚悟ができたならこの先へ行くといい。ああ大丈夫だとも、私はいつだつて

君の傍にいるから――

目次

鉾山の恐怖	1
薫り高き花のように	32
孤独な愛の先	41
幸福の価値 前篇	47
幸福の価値 中篇	66
幸福の価値 中編 2	85
幸福の価値 中編 3	115

鉦山の恐怖

人類を創り出した創造主の唯一の失態を一つ言えと言われるなら、私は一点の迷いもなく想像力であると言おう。その逞しい想像力故に人は経験した事でなくとも自然と理解でき、そしてその未知性に冒険心を震わせられるのだ。だがそれ故に身に覚えのない、もしくは自身の経験以上の恐ろしく矮小な人間の理解の範疇に留まらないモノと出会ってしまったとしたらどうなるだろうか。きつと宇宙の広大さの様な漠然とした恐怖に打ち震え、そして例えようなない迫りくる無限の恐怖に心の安寧を脅かされる事になるのは間違いないだろう。

今尚つんぎくように聞こえてくる音はまるで耳元で生理的嫌悪感を催す蚊の羽音によく似ている……いや、似ているだとか似ていないだとかそういう話ではないのだ。仮にそうであってもそうでなくても私はただ震え、怯え、己の身に訪れた不幸とそれを招いた自分の愚かしさを残りの人生をかけて呪わねばならない。やはり私は知ってしまったのだ、そして見てしまったのだ、想像してしまっているのだ。人間である事を捨てなくてはならない領域、深淵への片道。

まただ、あの音だ。私は見てしまった、聞いてしまった、理解してしまった。あの理

解したくもない、我々の理解の範疇を越えた……我々の信ずるところの神ですら矮小にしてしまうあの『存在』を。そして魅入られてしまった、無限に広がる宇宙に広がっている計り知れないほどの未知と恐怖に。彼らの存在を知ってしまった私は未来永劫、死に絶えても尚彼らにつけ狙われるのだろうか、それとも……。ああ、来ないでくれ来ないでくれ、なんなんだその翅は。もう嫌だ嫌なんだ近寄るな近寄るな、俺をその両手のモノで何をするつもりだ。やめろやめろやめろ、そのケースに入った脳のようなモノは
一体――

ミスカトニツク大学病院 精神科 患者番号107254の手帳より解読可能箇所より一部抜粋。

ここか、例の鉾山とやらは。現在私の目の前には古く、それでいて崩れかかった誰も近寄らないであろう寂れたとある地域にある鉾山がある。辺りは酷く暗く、それでいて打ち付けるように雨も降りしきっており、暗い雰囲気かつ実際暗い鉾山が何倍増しにも暗さを増しているようにも見える。

そしてそんな暗黒の扉を思わせる入口の穴には誰も入っていないであろう証明、そして入らせないであろうための警告テープはいつに貼られたかもわからないくらいにポロポロになりながらも、その役割を果たさんとばかりに伸びきってる。だがそんなもの

は私の道を阻む障害にはまるでならず、私はそのまま強引に破るようにして薄暗い鉾山内に入っていく。

私の装備は所謂登山に向かうような仰々しいものでも、そこいらにピクニックに出かけるような軽々しい装備でもなく、それら中間の様な荷物だけを持つていた。唯一の明かりであるハンディライト、そして中身のあまり入っていないナツプザックだ。ここに来てわかつた事だが私はここに到達した段階で、心をとて高揚させていたようだ。不覚にもきつと笑顔を顔に貼り付けている事だろう。何しろ、冒険だ。このそろそろ年齢が女性なら言うのをはばかり年になつても、やはり心だけは少年である様だ。

そんな今にでもこの廃鉾の入口より深く入ろうという所で、そういえばとここに来る前には辺り一体の村人たちに、やけにここへ来ることを止められた事を思い出した。無論私とてそんな妄言を聞いてやる程気も長くなく、殆ど話を右から左へ流していたが、幾つか気になることを言っていた者もいた。

『あそこは祟りがある』

『神のおられる庭なのだ』

『何人も死んでいる』

全く持つて馬鹿らしい。そんなありきたりな言葉で止まる程軽い覚悟で私はここに来ていない。こここの鉾山には未だに発掘されていない人類史以来類の見ない貴金属が

眠っているとも、無名者の莫大な財宝が眠っているとも、私の決して狭くはないコミュニケーションティでは言われているのだ。どちらかと言えばオカルト寄りのそのコミュニケーションティだが、その情報網は時折恐ろしく感じる程広く正確で、何度も私とその仲間達でその信頼性は確かめているのだ。

そして今回もまさにそのコミュニケーションティからの情報で、それはつい最近コミュニケーションティ内で大きな動きがあったのが始まりだった。勿論私としてもそんな美味しい話を放っておけるほど聖人でも、冒険心の欠けたくたびれた大人になつたつもりもなかったのだ。

そして鉱山の入口らしきところから入った私は、思ったよりも大きい廃鉱内の空洞を進もうとしたところ、案の定暗かつたのであらかじめ手元に用意しておいた少し強めのハンデイライトで足元を照らしながら当てもなく道なりに進んでいく。今回も情報通りであるならある程度進んだ辺りで情報提供者の『ナイアー』というグループの、実質的管理者から出されていた五芒星の中に目の書かれた印があるはず。

数分程歩いたのだろうか、進むにつれて外からの明かりも失せて気が付けば手元の煌々と光を上げるハンデイライトだけが頼りになっていた。だが、私は行き止まり……ではなく分かれ道にたどり着くことができた。そこには情報にも出されていた五芒星の中に目のように見える印が確認できたのだった。

ここまでこれば後はそんなに遠くもない、確か右だったな、そちらへ向かおう。私が

ハンデライトを右側に伸びる通路に光を当てた瞬間、ほんの一瞬だが、何かはその光を遮ったのだ。まさかこの中に人がいるのか？ 一瞬、動揺が走るものの、冷静に私は思考を巡らす。いや、この鉾山には誰も近寄っていないはずだ。というよりも、こんな所に私の様な者以外に用事があるものか。仮にいとすれば、それは私のコミュニケーションの人間である事は間違いないだろう。そうではないならこんな場所に人がいるのか、そうに決まっている。何故か私はここに居る人間の存在を頑なに否定しながら歩みを進めていったのだ。まるで、何かの存在を否定しているかのように。

結果として、やはり先程の影は私のコミュニケーション内の人間であるという結論が出た所で鉾山内の陰鬱とした暗闇に包まれ少し暗くなっていた私の心も、仲間らしきモノの存在を感じたことで少し晴れたのだが、そんな心持ちで更に私がまた一歩、と足を踏み出すと先程までと足元の感触が違う事に気が付いた。なんだろうか、少し濡れている。

疑問に思った私は何の気なしに足元を照らすが、相変わらず何の変哲もない少し赤みがかかった黄土だけが私の視界に入ってくる。先程より少し赤色が強くなっているようにも見えたが気にせず歩こうとするも、踏み出す足に抵抗するかのような湿気った感触に先程までの乾いた土とは違う事が嫌でもわかってしまう。

それに、鉄臭い錆びついた不快な匂いが私の鼻孔を突き刺すように刺激する。急激な環境の変化は私の心持ちをまたしても曇らせ、一刻も早く帰りたい、日の光を浴びたい

という欲求を体が訴え始めた。

だからと言ってここで帰ればコミュニティ内でも臆病風に吹かれた小心者とも言われてしまう事だろう。それだけは私の数十年の中で形成されたちつぽけな威厳が赦しはしない。私は意を決し、不快な匂いと感触に抗いながら更に深くなる暗影の中を歩んでいった。印のある分かれ道を曲がってからというもの、進むにつれて徐々に私の身にかかるストレスは高まっていった。

元々閉鎖的であるがために起こる不安感のものと、ここまでの道のりから一貫して変わらない風景。そして時折聞こえる何かがはばたくような羽音や何かが床を勢いよくする音。どれもこれも私のストレスを悪戯に増していくものばかりであった。私は無意識の内に床の土を蹴っていた。

更に変わり映えない道を進んでいくと、もはやどこまで来たのかもわからないが少し開けた場所に出た。私は一部屋分ほどしかない空間に異常なまでの安堵感を覚え、どうやら私の感覚以上に疲労とストレスがたまっている事を自分のことながら客観的に理解した。という事で私は少し壁に持たれて床にへたり込んだ。

すると面白いくらいに力が抜け、そのまま倒れこむように背後の壁に背中を預けて座り込んだ。やはり、自分のことながら他人事のように思えるがよほど疲れていたらしい。一旦私はライトの光をけし、しばしの間ここで休むことにした。

私は開けた空間のぼんやりと見える天井を仰ぎ見ながら大きな溜息を吐いた。過去にも探索事はコミュニケーションで行ってきたが、ここまで疲労したことも緊張したこともなかった。

今までの事が赤子の遊戯のように感じる程度には、私の今の心持は穏やかではない。逆にだからなのだろうかむしろ今の私は、新しいおもちゃを与えられた子供のようにあくなき好奇心が心の中を支配していた。これだけの探索だ、きつと目当てのモノを見つけた時の達成感はずさまじいものだろう、と。再び私の心にはハンディライトよりも輝く明かりが付くような思いだった。

少しの時間休憩した私は、再び探索を続けるべく開けた空間の先に進んでいくことにした。私は立ち上がるべく相変わらず明かりがハンディライトだけの中、床に手をついて力を入れようとすると、何か硬質な物が手に触れたことに気が付いた。なんだろうと思いいそれを手に取ってハンディライトの明かりを当てると、私は自分の触ったものと思わず息を飲んだ。

なんと、拳銃であった。それもまるで錆びた様子のないものだ。その人類の殺意の結晶ともいえるそれを見て、私は思わず辺りを見渡してここに人がいない事を確認してしまいました。その無機質な物体はこんな所にあるはずのものではないから、もしやここにこの物の所持者がいるのではという焦りからだ。結果として、その不安は早とちりに過

ぎなかつたのだが、私の全身はひんやりとした汗で濡れていた。

私は銃の知識は人並み、というよりは辛うじて扱える程のものしかなかったが、そんな素人目に見ても明らかに使用できないものではなく、偽物である様子もなかった。そして私にはそれがリボルバータイプのモノ、という以上にわかることはなく、どうしようか迷つたが、結局持つて行くことにした。何故だか今の私にはこれが必要になると、漠然とした予感だけが我が身を支配していたから、という事以外に説明は必要ないだろう。それはきつとこの異常ともとれる時間に、少なからず精神が毒されてる証拠だつたのだ。

私はいざという時のおまもりを懐にしまい込む前に、一応発砲を試してみようと思ひ立った。もし仮にいざというときに使えないのでは意味がない。それにここでの発砲音はだいたい深くまでやってきているので外まで漏れる事はないだろうと判断しての行動だ。冷静に考えれば、私が異常なまでに警戒心を高めている事がわかるのだが、この時私にはもはやそんな事に気をかけるだけの余裕がなかつたのだろう。

私は記憶通りにリボルバータイプである拳銃の撃鉄を起こし、そのまま特につけずに引き金を引き絞る。火薬の炸裂する衝撃と耳をつんざくような轟音が狭く暗い鉢山内に響き渡り、私の体と聴覚を襲うが、これが銃を撃つというのが初めてではないのでさほど動揺はしなかつた。そして放たれた銃弾は、壁に当たると共に壁を少し抉つた

ようだった。どうやらこの拳銃は使えない不良品などでは無いようである事がわかった。私は、謎の緊張から一度息を大きく吸っては吐き、その後拳銃を懐にしまつてから立ち上がったのだった。

私は拳銃の信頼性を確認してから探索を再び開始した。かと言って特に変わり映えも相変わらずなく、当てなくひたすらに伸びる道を歩んでいくこと以上に何も起こりはないのだが、いい加減この通路はどこまで続くんだと不安や焦燥感ではなく苛立ちが募り始めていた。

そんな不快感を解消するかのように、開けた空間から少し歩いたところでもたしてもハンデライトを遮る壁、行き止まりではなく別れ道が確認できた。そしてここにも、例の五芒星の中に目の書かれた印が描かれていた。もしや、これは私のコミュニケーションの誰かが目安として書いたものだろうか。だとすれば情報の中で目印として言われていた理由も納得できる。

確かここも右だったはず、私は壁の先に続く右の分かれ道へ曲がった瞬間、何か大きなものに躓き、突然の事だったがためにどうすることもできずそのまま勢いよく地面に転んでしまった。倒れる瞬間、思わず私は少しだけ体を捻って顔からは倒れないようにしたが、その衝撃でハンデライトを道の先に手放してしまった。突然の出来事に頭が追いつかないまま、私は立ち上がるべく手を赤の濃くなった黄土色の土に手をつくくと、

その土が不自然なほどに濡れている事に気が付く。いったい何だ、使用されていない鉞山に湧き水のであるところでもあったのか？　だが現在私の頼りであるハンデライトは道の向こうをチカチカと照らしているのです、私は自分の状況をまるで確認できない。

とりあえずハンデライトを取らなくては。それに落とした衝撃だろうか、あのハンデライトもこちらではなく深淵を思わせる暗黒の蔓延る通路を照らしているが点滅を繰り返しており、どこかいかれてしまった事を嫌でも理解してしまった。私はハンデライトの所へ向かってそれを拾うと、とりあえず戻って先程の私がぶつかったものと、湧き水らしき何かを確認しに戻った。何かはわからないが、取り除いておかねば帰り道に難儀することはわかりきっていたからだ。

私はやはり少しいかれていた点滅をくりかえすハンデライトを私の転じた場所へ向けると、そこにはここにあつてはならないモノを発見してしまった……そしてそのあまりにも衝撃的なそのモノを見てしまった事でまたしてもハンデライトを地面に投げ出してしまったのだった。

なんとということだ……！　そこには人と思わしき影と、その影から際限なく溢れだす湧き水……真紅の血液が絶え間なく地面に吸い込まれていたのだ！

私はその異常なまでの現実離れした光景に、初めは酷く動揺し取り乱した。呼吸は乱れ、心臓は痛い程に脈打ち、止めどなく広がるその痛々しい現実に理解がともではな

いが及ばなかった。

しかし数分程の時間をかけると先程までの冷静さを取り戻した。いや、取り戻さなくてはならなかった。そうでもしなければ、私は今ここで懐にしまい込んである拳銃で自分の頭をこの亡骸と同じようにしなくてはいけないだろうからだ。

そして私はその光景の異常さを改めて理解したところ、まずどうしてこの様になつてしまつていいのかをまず理解しないとイケないと思つた。もしも拳銃で撃たれた痕跡があるのなら、今私の懐にある拳銃がこの者を死に至らしめた凶器である事も否めないからだ。私は恐る恐るピクリとも動かない死体に近づき、その様子を可能な限りの平静を保ちながら観察していく。

なんとということだ。私の目の前に横たわつている亡骸の正体、それは私の所属しているコミュニティのメンバーの一員だった。名前はアルフレッドと言ひ、彼の勇敢さや猪突猛進さは私たちの孤独な探索時にも励みになつていたというのに。そんな彼はきつと今回も、持ち前の芯の太さでここまでやってきたに違いない。そんな彼ともあろうものが何故このような無残な姿に……。

それにこの拳銃、もしや彼のモノだつたのだろうか。それだとしたら何故あの様な場所にて？ それに何故彼はこんな通路の途中で。不穏な予感を感じながら様々な思考を重ねつつ、もう手遅れだろうが一応脈も確認しておくことにした。案の定、というより

も一目見ればわかる事だが、彼はその体から魂を切り離していた。悲しむべきか、やはり彼は死に絶えていたようだ。だがそんな事をしなくても一目見ればわかる、無残にも彼が絶命した理由だが脈を確認した時にはわからなかったのだが、その死因と思わしきモノが、全身をくまなく調べた時に見つけられたあまりにもおかしい異常性で塗り固められたような箇所があつた。

頭部だ、それも酷く大きい穴が開いているのだつた。ぽつかりと、奥が見えるくらいに。まるで科学室に置かれている人体模型のようだ。そしてその人体模型とは違ふ所は、完全に穴になつている。つまり何も無いのだ、本来あるべきものがそこに存在していなかった。言うまでもない、脳だつた。それが彼の死因……ないし犯人の目的、であるならあまりにも意味がわからない、理解し得ない程に常軌を逸している事であつた。そして私は彼の無残な姿と、その彼がこの場で亡くなつたという現実を受け入れるとともに、少し離れてまたしても心の安寧を取り戻す必要が出てきたのだつた。

私は酷く心を動揺させ、決して浅くない関係だつた知人の死に悲しみを覚えざるを得なかつた。するとどうだろうか、私の心の中には知人の死を悼む人情の表れとも取れる心ともう一つ、二つの気持ちで渦巻いていた。彼の死因、どう見てもこのような閉鎖された空間で鮮やかに行える手口ではない。その人間離れした手口によつて亡き者にされた、そんな彼の死に方を、このように物言わぬモノとして死に至らしめた理由を知り

たいという好奇心だった。自分でも、今の私は火を見るよりも明らかに異常であった。だが、それ以上に知りたかったのだ、純粹な好奇心だ、穢れを知らぬ少年の様な。未知のものとの出会う時はいつだってそうだ、だから私はここにいる。だからこそ私はあのコミュニティに所属しているのだ！『Chaos Garden』に！

私はかつて知人だったモノに近づき、その姿を整えてやる。決して幸福ではなかったであろうその苦悶に満ちた表情を、丁寧に直していく。絶望を奏でたであろうその口を優しく閉じ、驚愕と悲哀が混じりながら見開かれていた、もはや何もうつさない瞳を閉じてやる。

そしてその体を申し訳なく思いながら隅にやり、手を胸の前で組ませてやる。私はその抜け殻となったそのモノに手を合わせ、もうここにはない魂に冥福を祈る。ああ、安らかに眠れアルフレッド。君の探し求めたモノは必ず手に入れ、君の亡骸と共に埋める事を約束しよう。だから、少しの間眠っていてくれ。

私は気持ちの切り替えを行うべく、彼の亡骸を離れて先を急いだ。一刻も早く彼の死に報いるモノと、そして彼を日の当たる場所に帰してやりたいという気持ちだが、私の浮き足立っていた、そして臆病になっていた心を奮い立たせ、足を進ませた。

私は走り、走り、走った。平静を装っていたものの、事実親しかった者の明確な『死』というものは私の心を酷く痛めつけていたのだ。だが、悲しんではいられない。もしか

するなら、彼をこの世で生きられなくした張本人が、まだここに潜んでいるかもしれないのだ。そうなれば私はその者に容赦はしないだろう、彼の味あわされた苦痛以上の報復を行つてしまふに違いない。だがそれは悪い事ではないと異常な状況下でそう思い、私は心に歪な目的を掲げながら、先を急いで駆け足で土を踏みしめていった。

そしてあてのない通路を走っていると、地獄の深淵すらを生ぬるく思わせる暗黒世界であつた鉱山内に光の差し込んでいる所が目に入つてきた。駆け抜けた通路の先、距離で言えば大したことのない場所に、一本道の脇に部屋があるようだった。

もしかするとそこに、アルフレッドを亡き者にした犯人が潜んでいるのかもしれない、と漠然とした予感で私はそう思った。私は息を飲み、懐に仕込んでいた拳銃を取りだすと、極力音を立てないようにその光の漏れている、先の続く道の中の脇にある部屋らしい箇所近づいていった。

私が丁度光源の寸での所に來た瞬間、私の目の前には信じられないものが飛び込んできた。私が頼りにしていた光、その漏れる先の反対側の壁面に人間とは思えない、産まれてこの方見たこともないような謎のシルエツトが突如浮かび上がったのだ！

私はあまりの驚きから後ろに飛びのく勢いで後ずさり、尻餅をついた。そして再びその漏れる光源の先の壁に何かが写つていないか見ようとすると、そこには相変わらずの長方形型の光の跡が見えているだけだった。

な、なんだ今のは。ほんの一瞬の出来事だったが、明らかに人間の姿をした影ではなかった。でなければいったい何なのだ、あの簡潔に言うなれば……そう、昆虫を思わせる謎の影は。私は呼吸を乱し、あまりの動揺に立つことすらできず、ただそこに人間ではない何かがいるというだけで全身に震えが走っていた。

その震えは人間にとつての本能、遺伝子レベルで刻み込まれた原初の記憶ですら上回る程の圧倒的な理解しがたいものから来る恐怖によるモノであった。

私は未だ理解できぬあの影に酷く心を乱され、呼吸もままならないままよろよろと覚束ない足取りで立ち上がる。このまま座り込んでいられたらどれだけ幸せだろうか、そうも考えたがそれでは何も解決しない。私にはアルフレッドの死に報いるという義憤と、この鉾山に何かがあるのかを確かめるといふ義務があるのだ。

まさに今見えた謎のシルエツトも、私の知るべき謎の一つだ。故にこんな所で止まっては行かない、きつとあの影は何か……そう、きつと布や何かの類に違いない。そうでなくて一体どのようなにしてあのシルエツトに説明がつけられようか。私は無理矢理自分を納得させると、もたついていた足が再び動いてくれる事を理解し、再び光の漏れる通路の脇の部屋へ歩いていった。

私か丁度脇の光源の漏れる部屋へ入ろうとした瞬間、部屋を包む光が一際強く光り私の視界を理解できない程に覆い隠してしまった。何事かと思ひ、私は思わず瞼を覆い隠

してその光から自分の瞳を守る。そして数秒ほどその光が猛威を振るい、光が収まったと思われる所でおずおずと開いていくとまたしても驚愕のモノが私の視界一杯に入りこみ、握っていたハンデライトを思わず落としてしまったのだった。

私の貧弱な語彙力では絶対的に、圧倒的に表現のしようがない超近未来的創造物が、まるでSF小説の様ではなく狂おしい程の現実感を帯びてそこには存在していた。先程拳銃を拾い休憩していたあの少し開けた所と同じくらいのこの部屋には、辺鄙かつ排他的な空気を催す廃坑には似つかわしくない機械……いや、機械と形容するしかないモノが部屋を囲むように、円を描くように大量に鎮座していたのだ。私はこの飲み込めるわけのない、そして説明しがたい機械の群れを一応、できるはずもないのが持ちうる可能な限りの語彙と表現で表すことにしよう。

まず、目に留まったのは見るからに管理をしているであろう無数にも感じる機械の中で圧倒的な存在感を誇るモノだ。それは私の知っているPC、と呼ばれる物のディスプレイとそして巨大な管理システムだと思われる四角形の様な物で出来ていた。それは例に挙げたPCに酷く似てはいるものの、どこか決定的に違う……やはり言い表せはしないものの、明らかに『違う』という事だけがありありと理解できただけだ。

他のモノは謎のコードやホースの様な物が伸びていたり、ボタンらしきものがいくつも不規則にならんでいたり、何やら光のついていないディスプレイのついているものな

ど、常識にとらわれない形容しがたい機械と呼ぶしかないモノがスペースを開けながらいくつか置かれているのが見られた。

私は潜在的恐怖に怯えながらも、落としたハンディライトを再び手に取ると電源を一度きつて周りのモノを観察する事にした。だが後のモノも同じく数十年生きてきた過去の記憶の検索で理解し得るモノは一つもなく、やはりこれらは私の知りえない世界の、現実に存在するものである事がひしひしと現実として私の中に染み込んでくるのだった。私の知りえる世界の常識とは違うものがそこに現実として存在する。それだけの明確な情報から私は、ある一つの疑問に辿り着き、背筋が痛々しい程に凍る思いを感じたのだ。

『誰』がこんなものを……

単純かつ複雑、明確かつ不明瞭。決して重なるはずのない言葉が、この現状を残酷なほどに理解させた。あまりにも単純これは私が、少なくとも大衆の目に触れるものではない。それでいて酷く複雑……ならこれは誰が、一体何のために。だがそれでいて明確……明らかに表立って公表のできないモノである。そして最終的に感じるはその不明瞭さ……やはりこれは一体何のために。

無限とも思える思考の迷路に迷いながら、私は何か手がかりがないものかと部屋を落ち着きなく歩きながら機械……ここではそう呼ぶ事にしたそれら一連のモノを探って

いるとほんの一瞬、何か物が音を立てて私の背後で動いた事を張りつめる緊張の中で感じ取った。

どうやらその音は私の背後にあった、幾つか確認できる何やら複雑にコードらしきモノがいくつも伸びている、円柱状のガラスらしきモノに覆われながら中で気泡を立てて泡立っている様子の緑色の不審な液体の満たされたモノであった。どうやら先程までは明確に動いている様子ではなかった機械群が何やら動きだしたようである。

私は注意深く、唯一変化を見せるガラスケースらしい気泡を立てる透過性のある謎の緑色の液体から目を離さずに観察を始めた。握る拳が痛い程になり、汗も滲みながらも私はそれから目が離せなかった。その当たり前とも取れる注意深さ故に、私はそのガラスケースを注視した事を酷く後悔することになってしまふのだが。

ゴポゴポと不気味に泡立つその液体の中では、何かが浮かび上がってきた様だった。私は気泡でその正体がわからないながらも、必死にその浮かび上がったものからこの部屋の正体がわからないものかと出来る限り集中し、ガラスケースに現れたソレにじつと視線を注いだ。数分経った頃だろうか、次第にその泡立ちが沈静化していくことで徐々にガラスケースの中身が自然と初めのように見えるようになってきたのだ。

なんとそこには、きつといつかに本で見たことのある、そして生涯平穩に包まれていたなら絶対に目撃する筈のないモノ。人間の、脳が浮かんでいるのだった。それも一つ

ではない、周りにあつた複数の同じモノからも同じように人間の脳が浮かび上がってき
ていたのだ。

私はそこにあるはずのない宿主を失い、悲哀に満ちながら浮かんでいくソレに、あま
りにも現実離れた光景を見てしまった事で、勢いよく尻から地面に転んでしまった。
だがそんな地面に叩きつけられた痛みでさえ、穏やかでない心持ちの私の、圧倒的な存
在感を誇りながら私の視線を釘付けにするソレから注意を引くことはできなかつた。
せわしなく脈打つ心臓が危険信号を鳴らす、私の考える事はそんな事をまるで気にさ
せなかつた。

何故、なぜこんな所に、人間の脳が。理由が、意味が、意図が、まるでわからない。も
しかすると、私は迷い込んでしまったのだろうか。正常と呼べる人の踏み込んではいけ
ない、狂気の世界に。すると初めにここに入った時に見かけたあの影は、何かの科学者
だろうか。するとこの場所はその科学者の秘匿された研究所だとしても言うのだろうか。
馬鹿馬鹿しい。そんな狂気じみた事が、そして起きてはならない事が簡単に起こるもの
か。考えてもみろ。仮にこのような狂った理解不能な行動を起こすにしても、このよう
な寂れた廃坑で行うものだろうか。一般人の私でもわかる事だ、メリットはあるにして
もデメリットの方が確実に多いに決まっている。

私はありうる可能性を思考に反映しながら、目の前の非日常性をたたえるソレの衝撃

から少しずつ冷静さを取り戻していった。酷く心をかき乱されたものの、私にはやるべき事……義務感にもた感情がふつつつと湧き上がってきたのだった。アルフレッドと、この名も知らぬ犠牲者の魂の安らかな眠りのために、一刻も早くこの事を外の世界に公表し、犯人を一生日の当たらぬ地獄に叩きこんでやらねばと。私はもう探索の事などすっかり忘れ、いつかに忘れてしまった正義感の火を灯し、元来た道に戻ることにしたのだった。

私は謎の機械の蔓延る部屋から出ると、元々来た方の道を再び戻りながら歩いていくのだった。力強く握るハンディライトを片手に戻ることになった道は以前より明るく見え、恐るべき暗闇に対し、喜ぶべきなのか今や私の恐怖の原点でない事を感じさせた。部屋、と呼べばいいのだろうか。あの理解不能な機械達のあった部屋を出てからというもの、私の中では友人の死体を見た時の恐怖以上の言い表せない焦燥感が逆巻いていたのだ。

故にこの暗闇も最初の頃と比べたら恐怖感を抱かず、だが代わりに汗は止めどなく溢れ、呼吸は乱れ、視線も点滅を繰り返すハンディライトの頼りない光の中で、見えもしないのに辺りを必要以上に見回していた。私の一般的思考が当てはまるとすれば、普通来た時とは違い、戻るだけの道は通常ならその一度と通ったという漠然とした安心感があるとしてもおかしくないはずである。だがそれが無いというのはどうということだろ

うか、それどころかこの一度通ったからこそともとれる体にじわりと浸透するかのような不快感は。

チカチカと点滅を繰り返すライトの頼りがいのない明かりだけで歩いていく私は、ふと耳にここまで来るとき聞こえていたあの音が聞こえている事に気が付いた。羽音だ。まるで蚊が耳元で飛んだ時の様な、生理的嫌悪感を催す音である。だが、その音は近すぎず遠すぎずというくらいの位置、距離を感じさせながら私の歩みに合わせてずれていく様だった。

私が歩こうとその不審感から止まろうと、その音はまるで私に張り付いているかのようと同じ大ききで聞こえ続けているのだ。あまりにも不自然、かつその不明瞭さに私はまたしても心の安寧を悉く妨害され、一刻も早く、早くここから出たいと、なによりも願いだしたのだった。

焦燥感が募りながらも早足に戻る途中、体感だがそろそろアルフレッドの亡骸があるであろう箇所に近い時、私の戻り歩いた道の方から何やら音が聞こえてきた。ここからではわからないが、もしかすると先程の部屋からなつた音だろうか。その狭い廃鉾に響き渡った音はほんの一瞬で、その後は元の不気味なまでの静寂が再びこのハンディライトだけが頼りの暗闇に戻ったのだった。私はその謎の音に気を取られて足を止めたが、その瞬間にもどうするかを考えていた。

もしや、先程の機械達の置かれていた部屋の主が、何か異常を察知したのだろうか。それだとすると今もこうしてここに居るのは危険なのだろうか……何の音沙汰もないという事はそうではないのか？　するとあの機械達がまた活動を開始したのか……だとするならば私には関係が無い、一刻も早くここから出た方がいいに決まっている。

だが……

何故か、私は戻り来た道を、またしても戻ってしまっていた。もはや、正常とは呼べる精神状態ではないのだと。私はここに来て、理解してしまった。私は少年だったのだ、好奇心に満ちた。だから、戻るのだ……未知の詰まった、あの場所へ。何があっても後悔はしない、してはいけない、未知への探求とはそういうものであるから……。

きつと、私の口角は酷く醜く、吊り上がっていた事だろう。そして、先程からずっと聞こえていた羽音の様な音は聞こえなくなっていたのだった。

また一步、また一步と着実にあの機械の群れのある部屋へ戻る私だったが、ふと異常なまでにこの場所が寒くなっている事に気が付いた。肌は鳥肌が立っているし、何度かかいていた汗で濡れた服が、酷く冷たくなっているのだ。これは私の精神状態だけではなく、この廢鉱自体が冷えてきたという事なのだろうか。

それにしてはあまりにも突然すぎるのではないだろうか、ここに私が来てからは一度も体が耐えられぬ寒さを訴えたことは一度としてなかったではないか。それにいくら

廃鉾とはいえども、このように突然温度が下がる事などありえないだろう。私は、寒さゆえか冷静になる思考の中、この状況の異常性を湿り気のある土を踏みしめながら実感していくのだった。

そして、とうとう私の視界の先に光の漏れた道の脇に小部屋が確認できたのだった。距離としてはまだ離れており、手の平程度の大きさの光源が確認できるだけである。私は一度大きく呼吸をし、波立っていた精神を落ち着けた。そして意を決するとまた私は歩みを進め、今度は立ち止まることなく例の機械達の蔓延る部屋を入っていた。

何事もなく入ったその部屋は、依然として理解不能な機械達が存在するだけで何も変わった様子は見受けられなかった。強いて言うならば、先程までは動いていたのが人間の脳が納められていたガラスの様な物で出来た大量のケーブルの接続されたケースだけであったのだが、今はこの部屋に存在する機械全てが動いているようだった。どうやら、先程通路で聞こえた音の正体は、この機械達が動き出した音であると思われる。ここにある機械は何の操作も動き出した前例があるため、私も成る程、とすつと現実として理解することができたのだった。

私は物音の正体を理解し、結局は自身の不安を取り除くことができたので内心胸をなで下ろしながら部屋を後にしようとしたところ、突如として機械達が尋常ではない轟音を鳴り響かせた。私は何事かと辺りを見渡そうとするも、足元がおぼつかず床に倒れこ

んでしまった。違う、動揺してふらついて倒れたわけではない……部屋が、機械達が大
きな揺れを伴って動いているのだ！

私はその揺れに翻弄されながらも、可能な限り何かの変化があるかと思い、辺りを警
戒しながら乱れる体のバランスを床に任せながら見る事にした。一体何が起こってい
るのだ、地震でも起きているのか？ それにしては機械達は倒れる様子も、不規則に動
く様子も……いや、まさか規則的に動いているのかこれは！

私はその十分にあり得る結論に至ると、未だに揺れの収まらない地面を這うようにし
ながら出口の方へ体をすり寄せ、部屋全体を注視した。どうやら私の予想は的中した
ようで、部屋の機械達は一定の速さかつ少しだけ開いていた感覚をピツタリと詰め、こ
ちらへ、出口の方へ一斉に動いていたのだ。だが、特筆すべき点はそこではなかった。
その動き出した機械達はこちらへ向かっている、するとどうだろうか奥の方に、つまり
私のいるで口の方とは逆側に謎の空洞が少しづつ見受けられるようになってきたでは
ないか。数分と立たず機械達の動きは止まり、気が付けば私の目線の先に合った空洞は
こちらの出口と同じように人が用意に通れる程度の大きさになっていた。どうやらこ
の先にも道は続いている、という事だろうか。しばし私は考え、その先に進むかやはり
戻るべきかを考えた。

どうするか……一刻も早く外に出るべきだというのは、アルフレッドや、名も知らぬ

犠牲者のためになるというのに……わかっているのだが、わかっているのに私の足はすつかり揺れのおさまった床を確かに踏みしめ、先に行こうとしていないではないか。もしかすればこの先には私の求めていた物があるかもしれないのだ、彼らには悪いが私とて人間だ、すぐ為すべき事を変えようと仕方がないだろう？ それに、君らには関係ない……事だろう……？ 私はまだ見ぬ未知に心震わせ、息を乱しながら血走った目で先をにらみながらハンデイルイトを深淵を讃える暗闇の空洞へ向け、歩き出し――。

キイイイイイイイイイイイイイイイ

そんな私を差し止めようとでもしたかのように、突如機械達の動きだした時の音とは比較にならない耳に突き刺さる音がこの廃鉾全体に響き渡った。私はあまりの衝撃、そしてその尋常ならざる不快感……に体を丸めたりやむまで赤子の様に身を屈め包ますることを余儀なくされた。なんだ一体……この空洞の先からか？ 私は少しずつ沈黙化する音を不快に思いながらも、状況を把握すべく再び空洞の方へライトを当て、様子を伺う。

空洞の方からは、依然として正体不明の音が鳴り響いており、それは確実にこちらへと近づいているようである。だが私は危険信号とも取れるその音を聞きながらも、何故か逃げる事ができずにいた。きつとわかっていたのだろう、私の望むものがきつとそこにあると、幼いときから夢想し焦がれていた真なる未知がそこにあることを。きつと私

しこもぶついているのに、まるで痛みという感覚が脳まで伝わってこない。これらの異常を全身に纏いながらも、私は余計な事は何も考えられず、ただひたすらに一つの目的に向かつて全力を尽くして駆け抜けていく。きつともう、私の脳には全ての答えが出てしまったのだ、それを認められず理解できず、最終的にもつとも原初的な本能で。

恐ろしい恐ろしい何だあれは怖い怖い怖いクソクソクソ、ふざけるな何なのだあれは！ 早くここから出ねば、ふざけるなふざけるな！ まだ私は私は死にたくはない！

思考が恐怖で延々と回転をしながら、ひたすらに外を目指し駆け抜けていく私は、突然何かに足を掠め取られ、受け身を取ることも出来ずに思い切り地面に叩きつけられた。私は突然の事に異常なまでに恐怖を覚え、ひいひいと情けない声を上げながら倒れてもなお醜く地面を這いながらひたすらに先を急ぐ。そしてこの土は、やけに赤みがかって、湿っていた。

キイイイイイイイイイイイイイイイ

ま、まだだ！ あの音だ！ 来る、来るヤツが来る！ 私は思うように動かない足を必死に立てようとするも、何故か動かない足を恨みながら地面を必死に這いずり回り、ここから一分一秒でも早く離れようと地面に爪をたて、もはや痛みなどわからないくらいに外への渴望からひたすらに逃げていく。

少しずつ、少しずつ、私の必死の逃走も虚しくあの音が近づいてくる。強烈な不快感

を示す、羽音などという生易しいモノではない、宇宙から飛来する無音にして破滅をもたらす不協和音。矛盾などではない、そんなものではない、早く逃げねば。

私は、何かの力によつて後ろに力を入れようと無残にも引つ張られていく。嫌だ嫌だやめろやめろ!! こんなところで私は死にたくない死にたくない! あんな脳だけになりたくないアルフレッドのように死にたくない嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ!

手を地面に突き立ててもその手の抵抗は虚しく爪ごと剥がされ、指は無残にも変形しても私は地面に食らいつき連れていかれまいと抵抗するも、後ろに引きずる力は、そんなことお構いなしにと引つ張つていく。私は全ての抵抗手段を無為にさせられようと意地で必死で体をくねらせ、惨めに生に縋りつく。そして、私は体をねじっている間に、無意識の内に見ないようにしていた、私を引きずっている謎の影の方へ、人とは思えない程に歪んでいる自分の顔を、向けてしまった。

私の両目が、謎の影を捉えようとしたまさにその瞬間、私の体は謎の力から解放され、その身を投げ出された。そしてその影は、私の……足に絡まっていたアルフレッドの亡骸を引きずって、もはや暗闇とは呼べぬその混沌の中へその正体を沈ませていった……。私の目に映つたのは、理解不能な構造を……もはや言葉では表せない混沌にして原初存在であり、遙か彼方の銀河より飛来したソレは私の意識にその存在をやきつけていった。鎌と、翅と……考えるだけで意識が滅茶苦茶に掻き回される名状しがたい存

在は。

私は、体を引きずった。一時間だろうか、二時間だろうか、それとも一日だろうか。強烈な振動に時折襲われながらも、もはやモノですらない自分の全身を引きずりながら外を目指した。私の両目はもはや機能をなしておらず、ぼんやりとした景色の中をひたすらにただ惰性で映していた。

私は、その身にひんやりとした風を感じた。外だ。私は虚ろな目で空を見上げた。星、月、雲。久しく見た、世界。私は倒れこんだ。いや、元々倒れていたかもしれないが、そんな事は些細な事だ。伏せた地面は、酷く冷たく……それでも正常な世界の温もりを感じた。

自分でも気が付かない内に私の手には、拳銃が握られていた。その冷たさも、今となつては正常な人間の心の温かさすら感じさせた。

私は撃鉄を静かに下ろし、ここに來た事を悔い。

銃口をおもむろに口に咥え、一人の人物の歪んだ笑みを思い出し。

その引き金に手をかけて、恐怖に怯え。

最後の瞬間、脳裏に思い出されたのは……人間の脳の詰まったガラスケースを携えたあの存在。そして最後に私の耳に聞こえてきたのは酷く機械的な……『タスケテ』という声だった。

「院長、あの患者は？」

「ああ、日記を必死にとっているだろう。あれは自分が正常であることを確認しているのだ」

「はあ、ですが彼は……」

「そうだ、そういうことだ」

「何が、彼をそこまでさせるんですか？」

「さあ、私にはわからんよ。彼が夜な夜な何かに怯えていたり、春になれば、カマキリに酷く怯えて、夏になれば異常なまでに蚊に怯えて……それだけしかわからんよ」

「ですが……あまりにも……」

「いいや、同情することはない。きっと、あれは彼がそう望んだのだ。壊れてしまうことを……それに、笑顔じゃないか。歪んではいるがね」

「……私には、わかりかねます」

「ああ、わからなくてよいのだ。あと、彼の日記は絶対に見てはいけなからね。では、

頑張りたまえよ」

薫り高き花のように

——夢を見た。宝石よりも輝かしい黒色の髪を、爽やかな春風によってなびかせている少女の夢を。その均整な面持ちは……そう、桜を思わせる美しさと、儚さを危うい程のバランスの中で保っていた。こちらか、もしくはこちらよりも遠くを優しげに見渡しているその双眸は、宝石などと言う言葉では陳腐すぎる程で、そしてそれは見た者全てを魅了する程の妖しげな魅力を兼ね備えていた。そんな一人の美しい少女の夢を見た。いつの日か、叶わなくなってしまう私の儚く散った夢を。

目を覚ますと私は見ていた夢の幻想から引き剥がされ、ほんのり暖かい自分の体温を孕んだ布団の感触だけが占めるちっほけな世界に戻っていた。

「……はあ」

私は布団を半ば投げやりに剥くと、そのままひんやりとした床に足を付けて洗面所へ向かった。別に今日は仕事があるわけではないが、かねてからの……腐れ縁の奴に誘われた花見が今日はあるのだ。だから、わざわざ折角の休暇の日にこうして浴びたくもない冷水を顔にぶつけているのだ。

私は、正直に言つて今日の腐れ縁の誘いは断るつもりであつた。今日は特別な日であつたし、その為の準備も既に整えていたのだ。いや、だからこそ彼は私をこの日に誘つたのであろう。だが私は、今日行ふ予定の事が少しずれた程度にしか感じない。言つてしまえば彼には申し訳ないが、私とて一人の男だ。自分の事を他人にとやかく言われたくはない。本当ならばわざわざ出ていかなくてもいいが……まあ折角だ、一度くらいこの季節の薫り高い花たちを見てからでも用事は十分に間にあう事だろう。

余分な思考を水に流した後、洗面所を出て私は何も無い居間に入る。いや、一応モノはあるが、あるのは生活に辛うじて必要だったものと、大きな仏壇。私はほんの少しの溜め息を吐いていから、電気をつけるべく天井に垂れ下がる紐を一瞥してから電気をつける。

私はしばし目を瞑り、ここ一年の事を反芻してから、仏壇に飾られた写真を一目名残惜しく見た後にをその場から離れる事にした。

私は冷蔵庫のモノを適当に引つ張りだして胃にぶち込み、適当にそのあたりに散らかつていたすつかりくたびれたスーツを手を取つて羽織り、一足の靴だけがある玄関へ向かつた。

「………いつてきます」

私の望む返事は、暗い廊下に吸い込まれるだけで私の耳に帰つてくることはなかつ

た。

「もお先輩！ 遅いですよ！」

「……もう私はお前の先輩じゃないぞ」

私は、例の後輩に指定された近場の公園にやってきていた。しかしこの公園は、公園と呼ぶには些か広く、どちらかと言えば大規模な広場をイメージさせた。そんな公園の待ち合わせにうってつけの高くそびえる時計台に、彼は居たのだった。

私の心情とは裏腹に、元氣沢山といった様子の彼は名を藍那あいと言った。彼は男らしくない名前を気にしているらしく、私が彼の先輩であった頃はずっと上の名前で呼んでいたのだが、結局今のようにお前と呼んでいるのであった。

「んもく仕事の時は遅刻しない癖に、プライベートはホントずぼらなんだから〜」

「ふん、放っておけ。お前には関係ないだろう」

「へっ、冷たいんだから〜。まあもうなれましたけどね？」

「そりゃよかった。後輩が随分大人になって、寂しい限りだよ」

「ふん、そつちこそ当分は認知症にならなくて済みそうですね」

些か言葉のすぎるようにも思える会話だが、現役の頃はこの比ではなかったのものだ。私も彼も、まだ血の気が多かったからだろう。

「ま、そんな事より今日は花見ですよ、花見っ」

そう、今日彼が呼びだした用事とは花見であった。私が何故、と反論をする間もなく彼は私をあらかじめ確保してあつたと思われる場所へと引つ張っていき、この大規模公園に万遍なく育っている桜の木の中でも一際大きく、美しい桜の下へと有無を言わさず連れてきた。

「へへん、どうですか？ 一徹してこの場所ですよ、褒めてもいいんですよ？」

「……肝心なのは酒だ」

「それも抜かりなく！ はい、先輩の好きな日本酒ですよ、それも一ピン丸々！」

「……明日は人類滅亡の日だったか」

「くひひ、僕も同じこと考えてました」

彼は私の軽口を文字通り慣れた様子で受け流していた。そしてそんなことより、と同じく用意していたと思われる御猪口おちよこを差し出して、ほらほらと飲酒を催促していた。

「じゃあ、乾杯ですね」

「……おう」

私と彼は薫り高い花の下で、様々な思いを混ぜ合わせて乾杯をした。その乾杯の反射光で、私の視界で何かが光った気がした。

「……だからあの野郎はくつて聞いてますう？　せえんぱあーいい……うえつぷ」

「聞いている聞いている、吐くなら袋の中な」

「ありがとうございます先輩オロロ」

私は、また一口と酒に手をつけながら彼の随分な様子を眺めていた。昔からそうだが、彼は私に付き合うと言つて毎度のように先に潰れていた。それは何年たつても変わらないようで、私は少し懐かしい気分になった。

「……すびー」

「眠った、か」

これも昔と変わらず、彼は私よりも先に酔いつぶれて寝てしまった。私は眠った彼を横にして来ていたくたびれたスーツを枕代わりにしてやり、少し斜めになる様に寝かせてやった。なんとも言えないが、彼の寝姿を見ながら酒を飲むのは憚られたので、私は少しずれて桜の木の下へ移動して木にもたれかかつて、また一口と酒をあおった。

「……私も弱くなったものだ」

少しずつ歪む景色を冷静に捉えながら、また一口と酒を飲む。一人で酒を飲むようになったのはもう慣れたものだが……少し眠くなってきたな。

「……少し眠ろう」

私は眠りに落ちつく最中、そういえばここに誰も居なくないかという思考が脳をよぎったが、迫りくる睡魔には抗えずそのまま意識を手放した。

「……………んっ」

……………寝てしまっていたようだ。それに、少し暗くないだろうか。私が外に出たのは昼過ぎの筈だが。

「お兄さん、お兄さん」

「……………ん？」

私の疑問が解決する前に、未だに開ききらない瞼の前にどうやら誰かがいるようだった。この声、高さからするに女性のものだろうか。私は抗う瞼を眠気から解放し、目の前に立っていると思われる人物に視線をやる。

「やあやあ、おはようかな？ 時間的にはこんばんは、だけれど」

そこには、私の夢に現れた少女が立っていた。私は返事も出来ずただただ目の前の光景に目を擦りながら、唾然として口を開ける事しかできなかった。

私はあまりのシヨックに少し取り乱しながら、辺りを見渡した。……………ここは、私のもたれる不思議と光る桜の木が一つと、辺りを覆い尽くす闇だけが支配していた。

「……………そう言う事か」

「んー？ どうしたのおじさん？」

「ガキにはわからんことだ」

「もーひどいなあ」

私は、全てを理解して、自然体で目の前の少女に語り掛ける。

「なあ、お前は……」

「駄目」

「なら、私も……」

「駄目」

「ならどうすれば！」

「……もう少し、頑張つてよ。昔みたいに」

私は、息を飲んで流れそうになるモノを堪えて言葉を紡ぐ。

「そうか、そうだな。お前みたいな甘いちゃんに言われるとは……」

「わかつてくれた？ じゃあ、私は時間がないから行くね？」

「もう、いくのか」

「うん、少して約束なんだ」

目の前の宝石よりも輝かしい黒色の髪を、爽やかな春風によってなびかせている少女は、私に背を向けて、桜の木の下から離れていこうとする。

こちらではなく輝く桜を離れた暗黒を優しげに見渡しているその双眸は、宝石などと言ふ言葉では陳腐すぎる程で、そしてそれは見た者全てを魅了する程の妖しげな魅力を兼ね備えていた。

そんな一人の美しい少女を見た。いつの日か、叶わなくなってしまった私の儚く散つた夢の残骸を。

「じゃあね、お父さん」

彼女の一言は、私を混沌の深淵に引き込むには十分だったが。

「桜花おうかああああ!!」

無情にも、私の手は空を切つて。そして次に視界に入ってきたのは。

「オロロロロ」

輝かしい、吐瀉物であつた。

「ただいま」

私の望む返事は、暗い廊下に吸い込まれるだけで私の耳に帰ってくることはなかったが、それでもいいと私は形の崩れ始めた靴を脱ぎながらそう思った。

暗い廊下を進んで居間に入ると、私は手探りで電気のスイッチを探す。ブラブラと力なく手探りしていると、紐にぶつかった。私は溜息ではなく深呼吸をして、電気をつけた。

「……ただいま、桜花」

電気をつけ、仏壇に手を合わせた私はもう一度帰宅の報告をする。深呼吸をしてから私は仏壇に別れを告げて、スツと立ち上がる。

今日の事は……忘れよう。私が生きていくのは、優しい今日じゃなくて、ビターな明日だ。ベストではなくベターだ。忘却ではなく記憶だ。私には、理由ができた。目的ができた。やるべき事は、悔いなく生きる事。花は散ろうと幹は残るのだ。

私は、窓を開けて閉じられた世界に風を迎え入れた。その風に漂うのは、薫り高い花の香り。私の頬に一筋、輝きが伝う。

そうだ、今日は寝よう。明日からはやる事が沢山ある。今日の用事は丁寧に準備をしていたものの、それも果たさなくなったが、明日からはそれ以上に果たさねばならぬことが沢山ある。

「……おやすみ」

だから私は、部屋に垂れ下がった紐を落として、部屋の電気を消した。

孤独な愛の先

「究極の愛とは？」

燃え盛るような激情と共に、彼は不思議と冷めた表情で私に問いかけた。

「知らぬ」

揺れては消えゆく記憶と共に、私はこの場には不釣り合いなほどの笑みを浮かべる。

「我が同胞としてそれを知るために志を共にした」

彼は涙を流すことなく、感情と共に熱を吐きだす。

「そうだな、愛とは……私そのものだろうか」

私は目の前に燃え盛る拠点としていた森を眺めながら、正常の真似事をしながら姿を揺らめかせながら言葉を吐く。

「そうか、それは我らでは見つけられないものなのだな」

彼の姿はもう見えなくなり、視界と呼べるものには轟々と音を立てて無限に広がる深淵の焰。

「彼らの愛とは……己に向けるべきものだ」

私は、言葉を蠢く人型にとどめられた私自身に投げかけた。

「ねえ、お母さん。あの人どうしたの?」

「み、見ちゃいけません! ……あれ? ……もしかしてあの人……」

もうそろそろ肌も寒くなりはじめた最近になって思うのは、特に街を騒がしくする喧騒の中でもきつと自分に投げられてはいないはずの言葉でも、内容次第では割と聞こえるものだという事だ。私はふらふらと頼りない足取りで、寂れた町を彼と当てもなく進んでいく。

「どうかした? 気分でも悪い?」

「そ、そうじゃないんだけどね……」

私は彼に心配されると、心全てを見透かされているようでどこかもどかしくなる。確かに彼と私は二人で一つといっても過言ではないのだけれど、それでも気恥ずかしさから照れ照れとしてしまう。そんな当たり前を許されるような私じゃないけれど、彼といえる間くらいはいいじゃないか。

「もう、冬だね」

「ああ。もうこんな季節だ」

「あれからどれだけだった?」

「ん……一ヶ月？ それとももっと長いかな、短いかな」

「そろそろ、限界か？」

「うん、それは貴方も同じでしょ？」

「ああ、でも……後悔してない」

「うん、私も」

私も彼も、どちらともなく腕を動かして同じように動く。仕草も呼吸も、心音も。あつた当時はこんなふうじゃなかったけど、あの事件以来私たちは世界の誰よりも愛し合つて繋がつて、一つになつていた。こうなるきつかけと、出来事を作つてくれた『父』には感謝してもしきれない。

「これ、みてみろよ」

彼はふと目にとまつたであろう捨てられていた新聞紙を手に取つた。そこには『行方不明の青年、親族を殺害か？』という煽りの文が踊つていた。私はその記事を見て、思わずふふんと鼻を鳴らしてしまった。

「これ、私がやったのにね」

「確かに、青年って」

「おかしいね」

「おかしいな」

私と彼は同時に笑いだしてしまった。だがそれも長くは続かなかった。というよりも、それよりも大きな音によって、私たちの声は遮られたのだ。

「……あれが通報にあつた」

「ええ、間違いありません。容姿特徴など一致しています」

黒と白に彩られ、赤い不快な色を撒き散らすサイレンを備え付けた車から降りてきた二人組の男は、私たちを見てそう言っていた。

「逃げる？」

「無理だよね」

「わかってるけど」

「どうしよう」

「俺たちは一緒だ」

「もちろん」

「絶対だ」

「ねえ」

「なに？」

「……好き」

「……俺もだ」

一人の警官が、こちらにやってきた。

「はあ……」

「どうした？ 気分でも悪いのか」

「当り前じゃないですか、僕は精神病の権威でもないんですから」

「ああ、そうか。お前、今日担当日だったな」

「困ったもんですよ。飯は二人分、着替えも二人分、何もかも二人分だなんて」

「仕方ねえさ。更生させるのも、仕事の内さ」

「なら手当の一つでもだしてくれば……」

「仕方ないさ、残業みたいなものだと思え」

「それ、どうなんですか」

私と彼は体を拘束されたまま、愛を確かめ合う。私たちを阻むものは何もなく、お互いを引き裂く事など誰にもできない。私と彼は二人で一つ、決して結ばれる事なく、離れることはない。この現代で唯一無二の、アダムとイブ。

ああ、なぜ愛するものは認められないのだろう、フィクションの世界においてもそれはよくあるものだが。しかしどれも最後には誰にも彼にも認められ、ハッピーエンド。

全く持って馬鹿らしい。

真の愛とは、誰にも認められず、最後はバッドエンド。だが二人は永遠に幸せ、というものでいいのではないか。誰かに、世界中に認められる必要はない。彼が、私が認め合っていていればそれで。愛とは、閉鎖的で内向的で陰鬱で……一人に向けるべきなんだ。

「ねえ……好きだよ」

「ああ……俺もだ」

二人で同じ景色を見ながら、同じ世界を認識する。

『ああ、世界は……美しい』

部屋に一つの声が響いた。

幸福の価値 前篇

日も暮れた高層ビルの立ち並ぶ繁華街、そこでは様々な人の生活を浮かび上がらせる。ここでは騒音と機械音の響き渡る、騒がしくも幸福な大人の時間。私は、そんな優しく美しい世界に住んでいる。輝くイルミネーションと華やかな景観は見る者の全てに幸福感を満たし、常に綺麗に保たれる全人口数万にもこのぼるこの街は、住んでいる市民全員の安定した幸福の維持を果たす。寸分の狂いもなく走る自動車たちは完全機械操作であり、事故発生率も格段に減少した。強いて事故を起こすものと言えば、走り屋気取りでマニュアル操作の旧世代思考を持ち合わせた、気の違った狂人くらいだ。そしてそんな素晴らしい車は、電力を主としているため環境汚染などとは無縁のものでもある。

まさに現代のユートピア、それが私の住む街、世界でたった一つの幸福社会。そんな幸福を噛みしめながら、私は隣にいる数少ない友人と会話をしている。

「なあ、お前次の面会日いつよ」

「えっと、二日後」

「マジかよ、俺なんて一週間後だけ……耐えらんねえよ」

「まあそういうなよ、今日は俺たちでできる幸福を見つけようぜ」
「お、いいねえ」

世界は、幸福に包まれている。右を見ても左を見ても、上も下も。この世界に不幸は存在しない、あるのは幸福だけ。それも全部、『N様』が与えてくださる。それが世界の常であり、今後も揺らぎないものだろう。

私と彼はいつも通り、近場にあるいきつけの居酒屋に向かう事にした。と言つても既にその目的地は目と鼻の先にあつた。特に看板も宣伝もなされていない、ある種隠れ家的なお店である。外装も、ここでは珍しい旧世代の趣を残している木製の家である。

古風な暖簾をくぐると同時に、これまた古風な引き戸を開ける。居酒屋の中は現代では珍しく、外観と同じく旧世代の風情を残しており、私たちのような年の取つた人には好評だそうだ。現代の居酒屋としては少し変わった外装と内装をしているこのお店だが、突き詰めるかのようにテーブル席とカウンター席という形式すらも変わらず、まるで本当に旧世代の居酒屋にいるかのようである。

現在、テーブル席は私たちの様な複数客、カウンター席は、カウンターに今は誰もいないが、一人での見に来ている客がパラパラと見られた。そして、今では珍しい天井付近に設置されているブラウン管テレビからは、今ではすっかり視聴者の減つたニュース番組。もちろん一定の需要はあるもので、今日も今日とて細々と続けられているらし

い。そして私たちは空いている席があまりない事に気が付き、予約しておくべきだったかと考えているところで奥の厨房に続く暖簾のかかった廊下から、一つの人影がこちらに向かつてきていた。

「いらつしやいませーって、お二人さんじゃない。ささ、席は空いてるからどうぞー」

「ああ、こんな混雑してるのに悪いね」

「いえいえ、これも皆さまお客様のためですよっ」

奥からパタパタとスリッパの音を鳴らしながら出てきたのは、この店の女将……というと怒られるので看板娘の女の子だ。若くして『幸福維持権』を与えられており、この店にやってくるのは、そんな彼女に癒されたいという目的が多数であろう。まあ、私たちが似たようなものだが。

「いやあ、こんな綺麗な子に毎回お出迎えしてもらえるなんて……これだけで一日が幸福な気分が終われるなあ」

「やだ〜おだてたって、笑顔しかでないぞ?」

「ははは、あんまり立ち話してると仕事に支障がでますよ?」

「あ、そうだった! 一番テーブル二名入りまーす! じゃ、また後で伺いますね!」

そういうと彼女は最大限の笑顔をこちらに振りまくと、またいそいそと奥に戻っていき、他の客の注文や給仕などを始めだした。

「さ、俺らも座ろうぜ」

「おう」

私は彼の催促を受け、案内された席に座る。二人分の小さな席と小さな丸机だが、私たちにはこの小ささが丁度良い。それをわかって、わざわざ彼女はここを開けていてくれたのだらう、全く持って『幸福維持権』を持つ人は凄いものだ。

「さ、看板娘さんがくるまでテレビでも眺めてますか」

「そういえば、今日は幸福維持局の立ち入りがあるらしいな」

「ん、確か街外れのところだったか？　なんで立ち入りがあるんだ」

「なんでも、条例に反する活動と違法物資の所持じゃなかったかな」

「流石、天下の幸福管理局期待のエースは違いますな」

「そんなんじゃないさ、ただ俺は皆に幸せにしていってほしいだけだよ」

「それが中々難しいのさ、おっと噂をすれば……」

天井付近に備え付けられたテレビを、彼は食い入るように見始めた。どうやら、例のニュースのようだ。

『本日、管理局の立ち入りが行われたB地区郊外ですが、不穏因子らの抵抗により立ち入りが難航しており、現在も管理局によりB地区に人員が投入されている模様です』

「あれま、ここ最近のニュースにしてはやけに珍しいな」

「まあ、管理局や維持局、『N様』が出てきてから向こう数十年無かったらしい案件だからな……現場のしわ寄せがこつちまでくるから、やめてもらいたいものだよ」

「ま、デスクワークの辛い所はそこだな。でもまあ、管理局とか維持局は『N様』に週一で会えるんだから幸福じゃないか。俺ら普通市民なんて一ヶ月だぜ？」

「仕方ないさ、『N様』は御一人でこの世界の幸福を管理しておられるんだし、管理局や維持局もそのために努力してるんだ。一ヶ月でさえ、結構無茶したほうなんだぞ」

「わかってるさ、それはお前が一番知っててよく聞かされてるからな。そんなやつのお親友で、俺は幸せさ」

「本当だったらお前も管理局に推薦してやりたいんだが、どうも維持局にも管理局にも席が余ってないらしい。もし仮に、俺がくたばったらその席をお前に譲るように言っといてやるよ」

「んー、俺は今の職場気に入ってるしなあ。皆が笑顔で楽しい所なんだぜ」

「ははは、それはどこもそうだろう」

「それもそうだったな！」

たわいのない世間話、幸福な毎日。ああ、なんて幸せなのだろう。満足いく生活、満足いく親友、満足いく人生。これも全て『N様』のおかげ、『N様』のお導きのおかげ。こんな幸福が毎日続く。なんと、なんと恵まれている事だろうか……。

「すみませーんお待たせしました！ とりあえずビールでよかったですよね！」

そんな当たり前な幸福を噛みしめていると、看板娘の彼女が気の利いたサービスをここにちらにやってきていた。その手にはおぼんとビールの入ったグラスが二つ。言う前からこちらの望んでいるものを持つてくる彼女は、全く持つて素晴らしい人である。

「お、気が利くねえ。じゃああとはいつも通りつまめるものいくつか頼むよ」

「じゃあ、私も同じで」

「かしこまりーっ！」

「さ、飲もうぜ」

「ん、乾杯だ」

軽快な何かが弾ける音と何かが床に倒れる音と共に、爽快なグラスを叩く音が二つ響き渡った。その聞きなれてしまったこの場に似つかわしくない音に、私も彼も苦笑いしながらヤジを飛ばし始める。

「おいおい……人が気持ちよく飲もうとしたってのに何してるんだー！」

「ははは、看板娘さん。仕事熱心なのはいいけど、仕事がまた増えますよ？」

「わ、私としたことが……すみません皆さん、一杯私のおごりで提供させてもらうんでこ

こは一つ穩便に……」

この店に集まっている奴らから、どつと歓声が沸く。これもある意味、見慣れた光景

だ。幸福維持権を持つ彼女にしては珍しい……いや、よく彼女はやらかしているのだが。もしかしたらサクラでも雇っていて、店に客を呼ぶためのパフォーマンスだったりでもするのだろうか。それだとしたら、雇われている側はどう雇われているのか気になるものだ。そんな体を張ってまですることなのだろうか？

「ささっ、皆さん。いきわたりましたねー？」

と、珍しく考え事をしている間に、どうやら本当にいつも通り酒の入ったグラスが席に置かれていた。彼女もちやつかりカウンター席の向こうに位置どっており、準備万端な様子だ。ここは、彼女とこの騒動に一役買った誰かさんに感謝しつつグラスを取らせてもらおう。

「では、皆さん！ 乾杯！」

『かんぱーい！』

「おい！ 馬鹿ん番娘！ お前まで飲んでねえで仕事しろー！」

店の奥から一際大きな怒声、この親父さんの声があつていつも通りテンプレというものだ。思わず皆も苦笑い。だが、皆楽しんでる。皆で共通の時間を喜びを持って楽しめるのが、どれだけ幸福な事か。

「わわわっ、すみません大将！」

「おーい、こっちはつまみ頼むよー！」

「グラス空になったからもう一杯！」

「も、もう皆さん悪乗りしないでー！」

どうやら楽しい時間は、まだまだ続きそうだ。私は床に寝そべっている一人の男性を眺めながら、幸福を噛みしめるようにグラスを呷った。

「飲み過ぎ……いや、弱くなったのか」

私は一人、心地よいを少し通り過ぎた酔いの中、帰宅するべく繁華街の喧騒を少し離れた路地裏を歩いてきた。彼とは店を出た段階で別れていた。あの居酒屋が、私と彼を一日の幸福の終わり目なのだ。

「か、帰ったらすぐ寝るとしよう。明日も早いからな……」

私は覚束ない足取りと、鮮明さの失われた視界の中、薄暗い路地裏を歩いていく。路地裏といってもちつとも荒れている様子はなく、ただ建物と建物の上に細い道だからというだけの普通の道だ。……当たり前のことだったな。

と、物音一つしない静かな……いや、静かだった路地裏に何かを倒すような少々豪快な音が響き渡った。

「……ん？」

なんだ？ 私のように飲んだくれでもいるのか？ だとしたら、起こしてやらないと

維持局に連れていかれてしまうな。流石に私と同じ幸福を味わっている人に、そのような仕打ちはしてほしくない。人類は皆、幸福であるべきなのだから。

私は音のした方である仄暗い路地の曲がり角に、義務感に近いものから少しシャツキリとした体を向かわせる。

「おーい、大丈夫かー？　こんなところで倒れてると維持局のお世話になるぞー」
「……………うう」

私が奥の方に心配げな声掛けをすると、かすかだがうめき声のようなものが聞こえた。どうやら、本当に飲んだくれの幸福な奴がいるようだった。

「つたく、管理局の仕事じゃないってのにな」

ふふつと、笑みを浮かべながら私は声のしたもう少し奥の方の路地の曲がり角に進んでいく。そして、何やら悪臭のようなものが香っていることに気が付き、そうとう飲んだくれていることを完全に察してしまった。

「おい、なにして——」

曲がり角を曲がると、そこには壁にもたれかかった人がいた。いや、それはきつと人であるはずだ。ならなぜ。

「あ、ああ…………」

おびただしい程血を流し、腕も足も…………片方ずつないのだ。

「うああああ!!」

「う、うう……だ、れだ……あぶねえ、意識飛んでたな……」

「い、生きてるのか……!」

私はあまりの衝撃に臀部を打ち付け、激しく呼吸をしながら人の五分の二を失った、きつと人であろう人らしきものと会話の様なものをする。

い、一体何がどうなってるんだ。なぜこんなところに死にかけの人間が……維持局も管理局も一体なに……

『本日、管理局の立ち入りが行われたB地区郊外ですが、不穏因子らの抵抗により立ち入りが難航しており、現在も管理局によりB地区に人員が投入されている模様です』

そういえば……もしかしてコイツはB地区の不穏因子……だとしたら早く維持局に連絡しなくては。私は震える手を落ち着けながら、操作もままならず携帯電話を操作しようとするも虚しく地面に落としてしまう。

「お、い………まて! はあっ………ま、ず俺の話を………ごほっ、聞け」

「ひ、ひっ」

ソイツは息も絶え絶えで満身創痍なものにもかかわらず、私に話を聞けと言ってきた。こちらを鋭く睨んだその瞳は、何か強い意志をたたえているようで私には抗えない。維持局に連絡を取るの簡単だ、そのはずなのに不思議と彼にはそうさせない凄みのよう

なものがあった。私は震える手で携帯電話を拾いつつ、震えが止まるまでこの異常者の言葉に耳を傾けることにする。

「な、なにが目的なんだ。一体ここで何してるんだ……」

「……俺はB地区の郊外に住んでた、アウトサイダーだ」

アウトサイダー。幸福管理社会の輪から外れた、愚かな連中。少なくとも、私はそれだけのことしか聞かされていない。だとしても、この様子……いくら輪から外れているとはいえ、幸福なのは人類の義務のほうではないのか？

「維持局の奴ら……俺たちが違法物資だのなんだの難癖つけて……くそが……」

「な、難癖だと……それじゃあまるで維持局がアウトサイダーに危害を加えてるみたいじゃないか。維持局は全人類の幸福を——」

私がある種常識と化したその言葉を発すると、今まで衰弱していたと思わしき彼は、馬鹿にするようにして鼻を鳴らした。

「はははっ……そんな世迷言を言うなんてな……全く、ゴホッ……内部の奴らは腐りきったお花畑でいつまで寝そべってやがるんだか……」

羨ましいこったと彼は言ったかと思うと、懐からだした何やら緑色の液体の入った注射器を本来あるべきもの無くなつた部分へと躊躇いなく注射器を差し込んだ。液体が彼の体に吸い込まれるごとに彼は苦悶の表情を浮かべるが、その液がすべてなくなる頃

には彼の傷がグロテスクな音を立ててふさがり始めていた。

「ん……ああ、温室育ちのお坊ちやまは知らないかもしれないが、これは止血と傷の修復、痛み止めまでできる代物さ。ちつとばかりの中毒性と目を見張る値段が玉に瑕だが、俺らみたいな奴らには必需品ってわけだ」

「な、なんだそれは。そんな違法物資、もってていいのか？」

「だからアウトサイダーなんだよ。つつても、作ったのも俺たちだがな。上の依頼で」

「う、上のだと？ お前たちにそんな大層な物があるのか？」

私は未だ知らない……書類整理上の紙面でしか見たことのなかったこの街以外の様子に、すっかり足を地面につけて聞き入っていた。彼も、例の緑色の薬が効いてきたのか、少し饒舌になりながらも話を続けてくれていた。

「ま、上つていうのはお前らの上でもあるな。Nの野郎……俺らにこんなもん作らせたかと思つたら、今度ははした金すらケチつて殺戮か……嫌になるぜ」

「どういふことなんだ、まるで意味がわからない。『N様』が一体関わっているんだ、あのお方がそのような悪事に手を染めているだなんて」

「はあ……これだから温室育ちは……。いいか、これから言う事はすべて事実だ。嘘なんてこの異常なまでに清潔にされた地面のゴミと同じくらいあり得ない」

彼は五体不満足であるはずなのに、既に弱りきっているはずなのに……その瞳は酷く

憎悪に満ちつつ正義感のようなもので垣間見える。アウトサイダーは私たちに災いをもたらす……それが私たちの常識だ。それなのに、なぜ……目の前の彼が嘘を吐いているようにも、私たちに危害を加えるような存在でないと思ってしまうのだろう。この街では、世界では『N様』が私たちを導いてくださって、与えてくださって、それが幸福であるはずなのに。私は、『N様』のことに、全てを与えて全てをなしてきた全知全能ともよべる彼の人に疑問を覚え始めていた。これはどうしよもなく私の価値観を揺らがし、嫌でも多くの事を考えさせる。何か、私の知らない何かがこの世界にはある……そういうことなのだろうか。

「いいか、Nってのはそもそも——」

彼の熱烈な何かを訴える言葉は、この場には不釣り合いな程の軽快な何かの弾ける音にかきけされた。彼のさつきまでの狂気じみた意思をたたえた瞳は、ぐるりと一回転し遙か頭上を見定めた。彼の五体満足とは呼べないはずなのに、今にも動きそうな程の強靱な肉体は糸の切れた操り人形のようにふらりと揺らめき、一際大きく痙攣したかと思うと自分の血で作りに出された池に勢いよく叩きつけられた。

死んだ。誰がどう見たって、初めてこの光景を目の当たりにしたって単純明快に。目の前に突如現れたファンタジーが具現化したような、私の知らぬ未知の人物は呆気なく死を迎えた。それも、唐突に。

「ああ、大丈夫でしたか？　もう、アウトサイダーが一人逃げ出したってコイツのことだったんですね。全く、いつも苦勞するのは現場なんですから」

ぶんぶんという擬音が似合うような何故か直近で聞いたことのある女性の発する声で怒りを露わにしながら、私の見慣れている人物は私の後ろから突如として現れた。片手には特殊な形状をしたいわゆる拳銃と呼ばれるもの。旧世代のものではなく、幸福維持権を持たされている者のみが携帯できる、実弾ではなく一種のレーザーのようなものを打ち出す拳銃だ。それは資料の情報でしか見たことも、本来のその性能を知ることもなかったが、人を穩便に殺すには十分な性能であるらしいことがまさに今、私の目の前で証明された。私はまさか、まさか……と人を殺すだけの性能があるとは……せいぜい気絶が限度だとも思っていたのに。今までの日常を振り返りながらゾツとせざるをえなかった。

日常からの急激な非日常への転落の最中でも、私の頭は冷静かつ正確に現在の状況を不思議と把握していた。人間は自分の理解を越えた現象が起きた時、それを理解するために全霊を尽くすというが、まさに今の状態がそうなのだろうとぼんやりとした頭で私は考える。

そんな放心状態に近い私の様子を気味が悪い程に優し気に見下ろしていたのは、さつきまで私が酒に溺れていた居酒屋の、さつきまで皆に笑顔を振りまいていた看板娘で

あった。

「あ、アンタ……ここ、殺した……のか？」

「ええ、だってアウトサイダーですよ？ 存在そのものが幸福じゃないですよ？ あり

えなくないですか？」

「アウトサイダーだって人間じゃないか……それに片腕片足もない、そんな酷い事しなくたって——」

「なにいつてんですか、『N様』がアウトサイダーは悪だって言ってるんですよ？ その意味わかりますよね？ 生きてちゃ駄目なんですよ、わかります？」

「だから彼だって人間で、生きて幸福である権利が——」

押し問答に近いその会話は、私も彼女も決して引かないものだった。私とて『N様』のやり方に疑問は覚えたものの、この世界での当たり前を主張しているだけなのだ。それなのに何故、彼女は見るからに怒りを露わにし始めていて……まるで私が間違った事を言っているみたいじゃないか。

すると彼女は私との会話に嫌気がさしたのか、大きくため息をついたかと思うと澄みきった空に視線をやった。そして驚くほど澄みきった冷徹な瞳をこちらに向けた。

「うるせえんだよ」

「……え」

「さつきからピーピー言いやがって。こつちが女だからって舐めてんのか？ いい加減にその減らねえ口閉じねえとお前もそのゴミクスと同じようにすんぞ。生きて帰りたいや黙れ」

「な、な………いつたい何を………」

あまりにも冷徹かつ残忍な瞳と言葉の圧力は、私を地面にひれ伏させるには十分すぎた。男だとか女だとかじゃなく、ただ場数をこなし慣れきって麻痺したかのようなその行動に私は動けない。今になって気が付くのは彼女からは、人間味を感じない。感じられるのは日常生活ではまずつかない吐き気を催すほどの、血の匂い。

「幸福維持権、つてわかる？ これを持ってる奴は、一方的に幸福維持活動を行える。つまり、幸福を乱しているお前が、私に殺されても文句一つ言えない」

「だから、もつかい聞くぞ」

彼女は地面にへたり込んだままの私の目の前に、おびただしい程の血を吸い込んできた死の象徴をつきつけた。彼を即死させた、その凶器を。

「黙れ、いいな」

「は、はい——」

私が口を開いた瞬間、地面につけていたはずの手がペキツツという間抜けな音を上げた。私は一体何が起こったのか、その原因を見るまでは何故か実感がわかなかった。

「あ、ああああああ!!」

「だから、うるせえよ阿呆」

「ぎっ——」

またしても、間抜けた音と通常ありえない程の激しい信号を脳に送る私の左手。彼女の足が、私の左手の指をあらぬ方向に踏みつけて、曲げていた。そして直感、声を上げればまたやられると。

「ぐううう……」

「あれ、黙る気になりました？　じゃあ、私を不快にした罰として〜？」

「~~~~~!!」

またしても、激痛。脳だけでなく全身に襲いくる不快感を越えた激情の奔流。日常に浸りすぎた私には、到底考えたことのない痛み。だが声を上げれば……彼女の声を無視すれば文字通り殺される。ただ今は、こらえるしかできない。

「おおくすごいですねー！　それでこそ男ですよ！　じゃあ、早速本題といきましょうか」

「……………」

私は声を出さず、無言で彼女の声に首を振る。一体、私はどうなってしまうのだ。

「簡単な話です、ただ貴方は黙って何もかも忘れて、日常に戻ればいいんです。今まで通

りの幸福な日常に、何も考えずに済むぬるま湯みたいな現実に」

「イエスなら首を縦に一回だけ、ふってください。嫌ならまあ、死ねばいいんじゃないですか？」

そんなこと言われたら首を縦にふるしかないではないか、死ぬなんてもつてのほかだ。それにしても、ただ日常に戻るだけでいいだなんて……何か罨でもあるのではないか？ 私はきつと、とてもまずい状況に立たされているのではないだろうか。

「あはは、心配しないでくださいよ。私、有言実行派なんですよ、わかっているはずですよね？ 今の状況からして、選択肢は一つだって」

私はただただ怖いと思った、この日常を住処としないイカレきったこの女が……そんな女が存在するこの世界が。ほんの少し前までありふれた日常にいたはずなのになぜ……私はただ、幸福でいたいだけなのに。だがそんな泣き言は誰も聞いてくれはしない、ただいまは彼女の言葉に従うしかない。どんなに疑問を感じようが、どんなに理不尽だろうが……死んでしまつてはどうしよもない。だから私は……

「お、えらいえらい。またお店に来てくれたらサービスしますよ！ 皆さまの幸福を維持するのが、私の役目なんですから！」

屈託のない心からの笑みを浮かべる彼女は、本当に心の底から嬉しそうであった。だが、その狂気じみた笑顔の裏に隠された形容しがたい混沌とした思惑は、以前からのイ

メージとの乖離具合からも、私に恐怖を刻み込むには十分すぎたのだ。だから私は……眼前の強烈な悪意に、屈するしかできなかつた。ただ絶対に、幸福にはなれなかつた彼のためにも、私の知らない所で歪んでいる世界の真実を……この目で確かめると心に誓いながら。

な不安である。

そして私はあの一件のあとで、予想よりも凄惨にえげつない程に、ひしやげていた指二本を治療しなければならなかった。維持局の……つまり『N様』の管轄の病院に向向くのは、どうにも私は受け入れることが出来ず仕方なく街に点在している管理局や維持局の管轄である大病院ではなく、いわゆる町医者に行くことにしたのだ。まあ、町医者と言つても大きな声では言えない場所ではあつたが。そしてそんな町医者では保険も口クに降りず不幸そのものではあるが、非公認治療が黙認されていたり、今回のような短期間で怪我もしくは治療困難な重症ですら非公認治療と相まつて、早期治療が可能である急速治療をうけることができるのでそれは幸いと言つたところか。

それに対する昔から存在する自然治療だが、危険性などはほぼゼロであるのがメリツトであり『N様』公認……いつてしまえば政府公認であるがために巷では主だったものであるが、急速治療の登場により最近で自然治療は少しずつだが、数は少ないものもの急速治療にその座を奪われているらしい。

私としてはどうしても維持局、そしてその上に属する政府、言つてしまえば『N様』に對する不信感のようなものがあの一件以来頭から離れず、結果として会社のボーナスを軽く使い潰す急速治療を選んだのだが……。

「私は、どうしてしまったのだろうか」

上司も私の様子を確認して立ち去った今、古き良きキーボードを叩く音と上司たちの意思疎通の声しかしない部署内に、私の独白は吸い込まれていった。『N様』は絶対で……幸福の象徴であつたのに……私はまるで幸福を感じられず、思考ソースの全ては、その不信感に割り当てられていた。

「これは……」

私は、先ほどの上司が言った言葉の意味がはつきりとわかつてしまった。

「どちらさま……って、この前の管理局の方じゃないですか。どうです？　ウチの治療は？」

「ええ、おかげさまでこの通り」

「ふむふむ、それはよかった！」

私は管理局の方から定時前ではあつたものの、上司に無理を言つて早上がりをさせてもらい、この以前急速治療をうけた町医者に足を運んでいた。ここに来るまでは管理局に出向く際に使用する自前の新車できていたのだが、どうにもナビが裏路地の方には対応しておらず、しようがなく手動で運転する羽目になつたのだが。

病院……というにはいささか小さいここは、入口付近に誰も立っていない小さな受付に、入口から向かつて正面にいくつかの長椅子と長いテーブルが埃をかぶつて置かれて

いた。そしてその先に安つばいカーテンで仕切られた先に、手術台といくつかの怪しげな薬品類と非常口だけがある、本当に最低限のものがあるところである。

私と奥から出てきた白衣姿の初老をむかえているであろう、ここの院長である彼と、私は少し埃を被つた長椅子に向かいあう形で座りあつていた。

「どうですか、急速治療。巷で言われているほど悪いものじゃないでしょう? 『N様』公認の自然治療にも……いや、それこそ『N様』公認をいただける程の素晴らしいものと、そうは思いませんか?」

「……その通りです、この技術は確かに素晴らしいものだ」

「でしよう! ああ、私の面会日が待ち遠しい限りです。その時は私の発案した急速治療が『N様』にどれだけの幸福をもたらすのかをお伝えして……ああ、なんて幸福なごとか!」

私は、ぐつと感情と言葉が溢れだすのを必死にせき止めながら、ゆつくりと冷静に言葉を紡ぎ出す。

「……あなたの技術は素晴らしいものだ、それがあればきつと富も名声も……『N様』からの賛辞もいただけるもののはずだ」

「そうでしょう、そうでしょう! 町医者仲間やそのツテで独自研究によつて私たちが成し遂げ、更には正規医療として政府公認までいただいたのだ! なのに何故、私

たちの技術は認められても私たちの成果としては認められないのだ！ おかしいではないか、巷の奴は旧世代の自然治療なんざに頼りよって……私たちの病院のほうがより迅速にかつ安価で……おっと、保険が効かないからまだ安価ではないか……」

なぜ……彼らは悪くないはずなのに……ただこの都市の幸福を願っていたはずなのに。

「その、言いづらいのですが」

「すみません取り乱しましたね……で、なんででしょうか」

「悪いことは言わない、今すぐにも急速治療の技術を……捨ててください」

「……はい？ すみません、年を取ったからかいまいち聞き取れなくて……」

「……だから、急速治療の技術を捨ててください」

私の言葉は、まだ夕方であるはずなのに不自然なほどに暗い病院内に残酷にも響き渡る。私とて急速治療を受けた身として、こんなことを言いたくはない……だが。

「……それは、管理局としての意向なのででしょうか」

「いや……どちらかと言えば、維持局の……」

維持局、その言葉でひと月前のあの事件を思い出す。底知れぬ暗闇を球体にしたかのような瞳、残酷なほどに正義感を宿す言葉。絶対的な正義と、幸福を維持するあの存在を。だからこそ私は、彼に急速治療をやめさせなければならぬ。ただただ愚直に『N

様』のために思って研究を続けてきた彼に、その愚直な性格故に己を偽れない彼に、あの底知れぬ恐怖を味合わせないためにも。

「は、はは……冗談がすぎますよ管理局の方。なぜですか、理由が見当たらないではないですか。だいたい、私は——」

「これは維持局の……『N様』の意向なので」

そう、私が管理局の仕事に見たのは、維持局の次の仕事内容であったのだ。管理局は維持局の行った仕事や調査の内容を把握し、それを元に都市計画を立てたりするのが一つの仕事であるが、私が引つかかったのはB地区郊外の立ち入り調査を終えた維持局の次の仕事内容であった。それは……「自然治療に害を与える、危険な急速治療の早期対処」というものであったのだ。

「な、なぜ……急速治療は、私たちの研究成果は……政府に認められて、あとは『N様』の認可をいただくだけであったのに……」

「それは……私にもわからなくて」

正直なところ、私にもよくわからないのだ。ただ『N様』の代弁をしている政府の、更にその政府のお抱えである維持局が急速治療を今になつて認めなくなった、それだけである。ただそれだけではあるが、本当にそれだけの理由で彼の、彼らの研究は無慈悲にも終わらされようとしているのだ。良かった、私の判断は間違っていないかった。彼は意

地でも自分の意思を曲げようとしないだらう。ここで私が止めねば、ひと月前の事件の
ようなことになりかねない。

「い、いやだ。私は絶対に急速治療の研究はやめないぞ！ 私は『N様』に認めてもらう
ことを目標に今までやってきたのだ！ 私を……私たちを『N様』が見捨てるわけがな
い！」

「だから……駄目なんですよ。もう維持局は動き始めています、覚悟を決めていただか
なくては——」

私が彼の興奮をなだめようと、言葉を発した瞬間、

「彼の言う通りだ、覚悟を決めたまえよ」

「ひひひ、その通り、その通りってやつだ」

私を含め、二人しかいなかったはずの病院内に、突如として二人分の声が響き渡った。
私も彼も、冷や水を浴びせられたかのように緊張と驚きを隠せぬまま、その声の方へと
振り返る。

「うん？ 貴方はこの病院のものではない様ですね。どなたですか？ 無関係なものな
ら、今すぐ立ち退いてください。ここは維持局の立ち入り対象です」

落ち着いた物腰でこちらに問いかけてきたのは、スーツに季節にそぐわないロング
コートを着けた細身かつ長身の男であった。パツと見ではどちらかと言えばデス

クワークに向いていそうな、少し頼りなさげな見た目をしている、髪を短くキツチリとまとめてさえない眼鏡をつけた男である。……だが、私の抱いた第一印象を根こそぎ吹き飛ばしものが一つ……冴えない眼鏡のその向こうの、最近に一度だけ全く同じモノを見た覚えのある、その瞳であった。目的のためなら、『N様』のためならなんであろうといとわれない、その狂信にも似た冷徹な深淵を思わせるようなどこまでも吸い込まれそうな暗黒の瞳。

だがその危険極まりない存在感よりも、私が気になったのは立ち入り調査だ。今日管理局で確認したのは明日になっていたはずなのに、なぜ彼らはここに来たというのだ。

「いや、私は管理局のものだ。それより、いいのか？ 立ち入り調査は明日の筈だぞ。いくら維持局とはいえ、これは越権行為じゃないのか？」

「ああ？ なに言ってるやがる、お前らみたいなクソ温室育ちが俺たちの行動に口出しするのか？ これだから世間知らずな管理局のハエどもは嫌いなんだよ」

「おい、口を慎め銀。私たちの崇高なる仕事に私情を挟むなど何度言わせる」
「……ちつ、そうだったな。悪かった」

銀、と呼ばれた男は如何にも、と言った様相の男であった。もう一人の方と同じくスーツ姿ではあるものの、非常識なほどに自己主張をする筋肉が、スーツをこれでもかと張りつめさせている。衣服では隠せないその暴虐性を孕んだ体からは、見る者全てに

恐怖を覚えさせるだろう。無造作に伸びきっている髪も、まるで手入れがなされていない無精ひげも、まるで獐猛な野獣のような狩人を思わせる瞳も、全てが畏怖の対象であった。

その二人が放つ、私の知る日常からかけ離れた気配は、私を委縮させるには十分すぎた。それはまるでひと月前に覚えてしまった、産まれて初めて抱く心底嫌悪感を抱く畏怖の念と同じであった。だがそれを気取られれば相手の思うつぼであろうと思い、私は表向きだけでも強気の姿勢を保たせる。

「……私の質問に答えてください、立ち入り調査は明日の筈ですが」

「ふむ、答えと言われましてもねえ。仕事ですから、遅いも早いもないんですよ。ただ一刻でも早く、『N様』が不快に思われるものを排除するのが、私たちの正義ですから」

「答えになっていない、いくら維持局とはいえ——」

「ごちゃごちゃうるせえな。金、さっさと済ませて帰るぞ」

私の言葉を遮るように銀と呼ばれる彼は、もう一人の長身細身の金と呼んだ彼に苛立ちを含んだ提案をはじめめる。はつきり言つて、私たちはまずい状態であるに違いない。維持局の立ち入りというのは、きつとひと月前の事件と同じモノであろう。つまり彼らは人間一人分の『掃除』をしにきているのだ。

「ま、まで。彼は急速治療の研究は取り下げると、既に約束したんだ。今、私がここに来

ているのはそのためだ！」

「なっ!？」

「……ほう」

私の思い付きで発した言葉は、金と呼ばれた者と、私の側にいる医者の方に言葉を漏らさせた。こちらにいる彼は何かいいかげんではあったようだが、私の切迫した声を聞いたから黙つてうなずいてくれていた。金、と呼ばれた者も、何やら考えるように顎に手を置いて逡巡を始めている。

「おおい金、まさかそんな口からでまかせ信じるわけねえよな？　いいからさつさとよお」

「まあ待て、彼の言葉の真偽はともかくとして、もし彼が急速治療を手放すというのなら私たちの仕事はかどるといふものだ」

「……ははあ、なるほどな」

私はその二人の不気味な会話に、思わず生唾を飲み込んでいた。もし、これで彼を助けることができたのならいいのだが。二人の雰囲気はどうみてもそのような物ではなく、ただただ不気味かつ、不信感だけが募っていく。

「その言葉信じよう、管理局の者よ。では彼の身柄は維持局で一時的に預からせてもらうか？　私たちには、彼が技術を手放すという『決定的な証拠』が欲しいのだ」

「ま、そういうわけだ。そこのお前！ さっさとこっちにこい！」

「……従ってください、でないとうなるか私にもわかりません」

「……はい」

彼をみすみす維持局の二人に手渡すのは齒がゆいが、ここで逆らえば十中八九奴らに殺されるのは間違いないだろう。ならば逆らわず、波風を立てず、穏便にすませるしかない。私は頼りなげな医者の方を見守りながら、突然の事態にも対応できるように体に力を入れる。

「で、だ。君は本当に急速治療の技術を手放すのかね？」

「……はい。ですが、一つだけ言わせてください。私のしてきたことは決して、一度たりとも『N様』のことを思わずしてしたことはありません。すべてが、『N様』のためにしてきたことです」

「ほう……その言葉に嘘は一切無いと胸を張って言えるか？」

「もちろんです、私の全ては『N様』のためにあります」

「くっ、くくく……大した信心だな。彼の人も大層お喜びになるだろうなあ」

なんだ……なぜ銀とやらは笑っている？ それに何故さつきから腰の辺りを何度も何度も気にかけているんだ。何か、嫌な予感がする……。

「ふふふ、君のその素晴らしい忠誠心に免じて、本来君には伝えられなかったであろう彼

の人からのお言葉を聞かせてやろう」

「まあ、土産話に持つてけや……冥途の、だがな」

「お、おい！ 何を——」

私がほぼ直感に近い嫌な予感から彼らの間に立つべく席から立ち上がった瞬間、銀とやらが何かをいいかけながら腰の辺りからひと月前に一度だけ見た、幸福を維持するための絶対的な恐怖の象徴を抜き放っていた。

「え……？」

「君の急速治療は、邪魔なんだ、とな。彼の人は、君を処分対象にしたんだよ」

金とやらの口から放たれた衝撃的な言葉は、この場には似つかわしくない軽快な音に掻き消された。いや、そうだと願いたかった。きつと彼には絶対に聞いて欲しくない言葉だから……『N様』のために生きた彼が、その人に必要とされていないどころか、邪魔者扱いされていた事実など。

そんな私の願いを悪魔がそのまま現実にしたかのように、目の前で医者 of 彼が糸の切れた哀れな操り人形のように力なく床に横たわった。

「……つたく、金は無駄なおしゃべりが多いんだよ。俺も大概だが、お前はもつとたちが悪いぞ」

「何を言っている。私はただ彼等（カミ）に真実を教えてやっているだけじゃないか。君らの信

「更に言うなら、君たちは幸福の管理……つまり管理局で働いていて、そのことに誇りを
持っている筈だ」

「その実態は、知っていたのかね？」

目の前に転がる死骸。それが、私たちの仕事の本質……？

「君らが誇りを持つてしていたことは、こんな幸福からかけ離れたことだっ
たのかなあ？」

違う、違う違う。私はいっだってこの街の、幸福都市のために、友人や同僚のために
この街の幸福を脅かす不穏因子たちを――

「……あ」

「ようやくわかったかね。君のしてきたことは幸福の管理でも、市政ゴツコでもなん
でもない」

「ただの、人殺しの片棒担ぎなんだよ？」

「あ、ああ……」

『なあ、お前はなんで管理局に入ったんだ？』

『別に……ただ、この街の……幸福都市のみんなが誰も不幸にならないで幸福でい
たいって思っただけさ』

『へえ……叶うといいな、その夢』

私の信じてきたものが、信じてきた幸福が、信じてきた『N様』という幸福の象徴が、どこか遠くに行行ってしまったみたいで、ただ少しだけ頭がついていかない。

「おおい……だからそれが悪い癖だつてんだ。死ぬ前のやつにくらい、良い夢見せてやれよ」

「何を言っている。彼はこれまで十分見てきたはずだろう？　ありもしない、幸福という名の仮初に作られてきた悪夢に、な」

「お前やっぱり悪趣味だわ。まあそういうことだ、死んでくれ、な？」

目の前に、死骸を積み上げるための凶器がつきつけられている。だがそのことを理解はしていても、体は石のように動かない。この感覚は、やつとの思いで作り上げた砂の城を、圧倒的な不条理で崩される子供が味わう虚無感に似ていた。

「答えてくれ……なら、私はいつたい今まで何を——」

「ふん、わかりきったことを。すべては『N様』のために、この都市の絶対理念だろう」「ちつ、さつさと処理したいが再充電がまだだな。このポンコツめ、早かつたり遅かつたりいい加減にしやがれ」

私は『N様』のために生きていた、これまでも、これからも。そのはずだったのに、なぜこんなことに？　私のしてきたことは、ただ薄汚れた仕事だったと？　じゃあ、この幸福都市っていったい何なのだ。『N様』って、なんなのだ。私の積み上げてきた数十年

が、音を立てて崩れていく。

「……ぎけるな」

「ふん、もういいだろう。さっさと処理して帰るぞ、銀」

金は、身に纏っているコートを翻し、私に背を向けた。

「つたく、めんどくせえ。じゃあな、良い夢見ろよ?」

銀は、私に向けた死の象徴に指をかけ、そのまま引き金を引き絞った。不思議と、恐怖はなかった。

部屋にまたしても軽快な音が響き渡った。その後、まるで銅像でも倒したかのような先程よりも一際大きい何かが倒れる音が、聞こえていた。

「さて、次の現場が待っているぞ。早く帰らねば——」

瞬間、金の腰あたりに鈍痛が襲った。金の細身の体ではその衝撃は抑えきれず、進行方向である入口の扉に叩きつけられた。

「な、なんだ……銀! いったいどういうつも、り……」

金の目の前には時間相応ではない、いつのまにか夜刻を向かえた病院の暗闇に隠された、二つの眼光だけが確認できた。金には、まるで自分の鏡がそこに立っているかのよ

うな錯覚を覚え、状況の把握がまともにできなかった。

「き、貴様。銀を、銀をどうした！」

「……ふざけるな」

「質問に答え——」

またしても、軽快な音。短時間で三回目である。

二人、手にかけて。二人、救えなかった。

「四人」

半分は、己で地獄で清算しよう。もう半分は、清算させねばならない。この都市の幸福の象徴である、『N』に。偽りの幸福を押し付けてきた、『N』に。

死臭が充満する病院が嫌になり、外に出ると雨が降り始めていた。まだ小雨でもないが、今にも泣きだしそうな程、暗い暗い、どこまでも深淵を思わせる悲し気な空模様だ。

「……寒いよ」

心にぽっかりと穴が開いたみたいで、吹き抜けていく寒々とした風がとても心苦しい。なぜなんだ、私も死んでしまった医者も、この街のために『N様』のために生きていたのに。なぜ裏切るのだ、この世界は、『N様』は……。

「おやおや、大丈夫ですか？ 雨が降っているのに傘もさささず」

私はよほどほうけていたのか、見ず知らずの薄汚れた格好の老人がこちらにきて、傘を私の上にかざしてくるまで既に雨が降ってきていたことにすら気が付かなかった。

「あなたは……?」

「私も同じです、この世界に……彼の人に裏切られたのですよ」

彼はそういうと薄汚れた服に隠されていた体を、忌々し気に服を破り捨てて見せてきた。そこには、おおよそ人間が普通に過ごしていたらつくはずのない量の痛々しい生傷と、血は出ていないものの、あるべきものがない空洞が私の目の前に晒された。

「もし貴方に覚悟が……この世界でまだ生きていく覚悟があるのなら、私と来なさい」
「貴方に、この都市の真実を知る覚悟があるのなら」

そういつて彼は、私の目の前に不自然な機械音のなる右手を差し出してきた。

「私は……」

私は、ひと月前の事件の真相も、今日なぜこんなことになってしまったのかも、この都市のこともまるでわからない。そして、『N様』のことも。

私は、この幸福都市に住む皆に幸福でいてほしいと願っていたのに……自分とて例外なく。なのに『N様』は……彼の人は裏切った、私の心と彼の人を信じる人を。

「絶対に赦すものか、『N様』を……彼の人を」

私は左手に握られた、この都市の幸福を守るための凶器を今一度握り締め、誓う。こ

の世界のことを、必ず彼の人から聞きだすと。そして清算させる、きつとこれまでも行われてきた幸福とは真逆のことを。

「ふむ、これで貴方も私の……私たちの仲間ですね」

彼から差し出されていた右手を、私は覚悟をこめて右手で握り返す。すると彼は路地裏の深い、どこまでも深い深淵を思わせる暗闇を背景に両手を開かせ、その暗闇に沈みながら高らかに声を上げた。

「ようこそ、不幸都市へ」
アウトサイド

私は彼に続いて、その暗闇へ身を投げた。少しの心残りを、光の中に置き去りにして。

幸福の価値 中編2

一筋の光たりとも届かない、どこまでも深く続く先の見えない暗闇を溜め込むあるビルの一室。おおよそ事務などで使われていたであろう机や書類が規則正しく並べられており、そこには規則正しい呼吸音を鳴らすくたびれたスーツ姿の長身長髪の男と、隠しきれない異音……体内から響く機械音を長めのコートとフードで隠す、怪しげな笑顔を浮かべた男がそこにいた。

「……」

「お早い事で。では次の仕事ですよ」

「……了解」

声をかけた者は、仕事柄なのか少しへりくだった口調で眼前の相手へと話しかける。声をかけられた者は、両手に持っていたモノを何の感慨もなさそうに床へ落とし、機械音を鳴らすおおよそ人間である者の隣を規則正しく歩いていった。その際に、一枚の紙を受け取りながら。

「……おやおや、今回もど派手にやってくれましたね。それに仕事の時の変わりようは毎度びつくりしますねえ」

「まあ、愚痴もほどほどに掃除屋スイーパーの仕事ぐらいしつかりしますか」

彼は辟易しながらも、コートの下に仕込んだ仕事道具を探りながら、当たりに飛び散った赤色の液体と肉片と、五体不満足になった人だったものをみて、再び溜息をもらした。

夜の闇に紛れ、轟々と鳴りやまない機械音を響かせる街の、更に騒々しい人混みをすり抜けていく。一年も経つとすっかりなれたものだが、初めはこんなにも人がいる事にすら戸惑ったものだ。

「へい、兄さん。最新のオイルどお？ 稼働率200%は固いよ」

「それじゃ壊れちまう。私に売りたいなら本体の方から頼む」

「ちえー、兄さんいつもそうやって断る」

「すまないな、気にいってるんだよ。今使っているのが」

売り子との何気ないいつも通りの会話。片腕をブラブラさせて、これは変える気がないんだぞ、と何度も言っているのに彼はいつも飽きないくらいに声をかけてくるから困ったものだ。こうして何気ない会話ができるのも、この都市のいいところではあるが。

「あら？ そのスーツのお兄さんどうですか……っってお久しぶりねえ。貴方がこの

街に来た時以来ね、こうして間違えたの〜」

「おや、あの時の娼婦か。元気にしてるか?」

「うふふ、お蔭様で。貴方の腕一本に見合うくらいに生活はしてるつ、も、り。あともう少しオブラートに包んで頂戴」

「そうかい。どうでもいいがもう危険な事には首を突つ込むなよ?」

「わかつてますよ。で、今日は暇かしら? よかつたら腕一本で出来ること以上のサービスしてあげるわよ?」

「折角のお誘いだが、これから仕事があるんでな。またお願いしよう」

「ふーん。かれこれ一年同じこと言われてる気がするわあ」

「ははは、気のせいだよ」

私がこの街での初めてのの仕事は、彼女がしでかしたことの後始末だった。もちろん始めてからか不手際も多く、失ったものもそれなりにあった。だが、こうして依頼人の笑顔が見られているなら、まだやった価値もあったというものだ。

いくらかの人の波を掻き分けていくと、気が付けば辺りには騒々しい機械音も人混の喧騒もなくなっており、聞こえるのは不気味なくらいの静寂がもたらす耳鳴りだけであった。どちらかと言えば私は幾分か、こちらの静寂に包まれた迷路のように入り組む路地裏の暗闇が好きである。

「おい、止まれ……つて兄さん。これから郊外いくんですかい？」

「お仕事お疲れ。どうだい、機械の調子は」

私がある一定のラインまで歩いていくと、どこからともなく彼は現れた。文字通り浮かび上がるように。だが気配が消せていないのと私としてはもう見慣れたものなのであるから、浮かび上がった人物……一昔前の警備員と呼ばれる者の服を着た彼に、労いと世間話をする。

「調子はいつも通りですよ。アウトサイドの主要エリアが都市の奴らにやられないのも、この技術力のお蔭ですね。まさか奴らも予想だにしないでしょうね、アウトサイドとの間に、実は何もないだなんて」

「確かにな。彼の人切り捨ててきた者の、集大成とも呼べるものだからな。むしろこちらが人して正しい発展をしている気がするよ」

「それは……都市出身者だからそう思うんですか？」

私は思ったよりも寂しい顔でもしていたのか、彼は少し不安げにこちらを見ていた。もう一年もたったのに、私はあの都市に未練があるのだろうか。いや、一人だけ置いてきたことを後悔している奴はいるが……私は、もうアウトサイドの人間だ。過去は、光の中に捨ててきたはずだ。

「ふふふ、気にしないでくれ。私にも血も涙もあるからな」

「……そうですか。また戻ったら一杯飲みましょう」

ありがとう、と私は一言だけ彼に別れをつけ、また歩を進めていく。こんな日には腕が疼く。私は規則正しい機械音を鳴らす、おおよそ人の温もりを感じない右腕の稼働を確認する。私の意思を汲み取るように、人の腕にはない少し張りつめた箇所から収納されてきた一丁の銃が現れる。

一年前よりも小型にしてもらい、いつでも使えるようにしてもらった忌まわしき銃。改造により装填数は六発、バッテリーの持つ限り再充電で何度でも発射が可能な、都市の維持権を与えられた者が所持する物である。

「……ふふけるな」

私は息を大きく吸いこみ、銃のグリップ部分を持ち引き金に指をかける。息を吐き、足を進めていく。この銃は、私の覚悟。私の全てを作り、全てを裏切った世界の産物。こいつを彼の人に打ち込むまでは、私は生きていけない。その先は、考えていない。

「さて、今日も仕事だ」

だから私は、いつかくるその日が来るまで、ただ自分の役割を果たす。アウトサイドが反旗を翻す、その日まで。

「……流石にずつとこの重さを持つのは厳しいものだ」

私は仕事を終え、少しだけ重くついた麻袋に詰められた荷物を肩に担ぎながら、仕事終わりに呼ばれているアウトサイドの象徴とも呼べる一つのビルに足を運んでいた。

ビルと言っても高層ではなく、五階建ての20m程の小さなものだ。基本アウトサイドの建造物からは光は最低限のみと決められているが、このビルは最低限どころかまるで光を吸い込むかのような漆黒の黒色をしている。

そしてアウトサイドの街を守る技術と同様に不思議なほど背景と同化しており、私のように権限を持たされていなければ気が付くこともないという無駄に凝った作りをされている。このビルがどういった目的で存在しているかが、漠然として把握させる異質としたつくりである。

「で、玄関はどこだろうか」

光どころか存在感の怪しいビルには、どうにも入口らしき扉も何も見当たらない。更に困ったのは上司が『来ればお前さんならなんとかなる』というような適当な事言っていたのだ。

「……五階だったはず。ガラスの一枚くらいは許してもらおう」

はあ、と一つ溜息を吐き、私は荷物の麻袋を背負う形で仕事道具の強繊維の紐で縛りつける。過剰ではあるが、仕方ない。そしてその後、仕事終わりで温まった体の動作確

認をしていく。まあ、無理ではないだろう。最近では仕事道具の八割は使用していないかったので、ここらで一度動作確認をするのもいいかもしれない。全身に装備されている道具たちを一瞥し、全身を震わせる。

「さて、アウトサイドの技術力の再確認だな」

幸福都市から追い出されるようにしてきたアウトサイドだが、実のところ一つの町と言うわけではなく、いくつかのブロックに分かれている。それでいて幸福都市を囲む形で点在しているため、五角形を模したイメージで五か所にわたって存在している。距離としては徒歩なら丸一日かかる程離れ分断されたアウトサイドだが、彼らは一時間としてかからずその五か所を回ることができる。

種明かしとしては経路の確保と移動手段の存在でしかないのだが、そんな大掛かりなものを設置していたら幸福都市に気が付かれているのではないか、という疑問が一時期浮上した。だがそのようなことなく、アウトサイドが繁栄の一途を辿っているのは、皮肉にも幸福都市から見放された人々の技術力あつてのことなのだが。

「……さて。アウトサイドが成立し百年がたったが、先代たちの意思、そして悲願であった計画が近づいている。それは私たちの代として同じこと。無論、同志らはわかっていま

すな？」

灯りがともされていない、集まっている彼らの背後から窓ガラスから漏れる光だけが差す室内で、厳かに重々しい声音で五角形に形作られた机で向かい合う四人に問いかける、アウトサイドの現トップの初老をむかえた男性である。だがその姿は、初老を迎えたにしては常識と離れた若々しさを保ち、短く整えられた髪からは肉食獣のような野性味があふれだしている。身に着けているアウトサイドでは貴重かつ高価なスーツですら、その全てを包括する体軀の凶暴性を隠しきれない。

「無論」

「わかっていきますとも」

「同じく〜」

「……」

その他の四人も同じく五か所に点在するそれぞれのアウトサイドのトップであり、同じく初老を迎えている筈であるにも関わらず、一人を除き若々しい肌と、全員に共通して健康的な肉体をしており、その存在感は他を圧倒する何かがそれぞれから発せられていた。

一人は細身で驚くほど普通、一人は存在感怪しく陽炎のように揺らめき、一人は常軌を逸した程の美麗、一人はこの場で唯一の年相応の気迫と外見を持ち合わせている。

「本日集まっていたのは他でもない、私の直属の部下にある人物の確保に向かつてもらっているからだ」

「その人物とは」

やや機械的な受け答えが特徴の細身の者が、もったいぶった言葉に質問を投げかける。

「彼の人の拠点とされる、幸福都市の中央に存在する高層ビルの建築責任者と、その設計者だ」

「では、そろそろ計画の……?」

「その通り。彼の人を抑え、幸福都市と不幸都市の併合を図る——」

トップの者が腰かけていた椅子から勢いよく立ち上がり、声高らかに宣言しようとしたその瞬間、彼らの耳にはトップの者の背後に存在する窓ガラスが勢いよく割れる音が聞こえていた。

「なんだく?」

「……敵襲か」

美麗な者は気だるそうに席を立ち、揺らめく者はいつ立ち上がったかもわからず顔と思われる部位が上に上がっている。各々別の戦闘態勢を取る中、トップの者だけが唯一冷静にその状況を判断していた。

「これはこれは盛大な登場じゃないか。大丈夫です同志よ、席についてください」
「ふむ、この人が貴方の懐刀の」

「二年足らずで、成果を出したという」

一人は顔を覆うくらい長の髪から、見定めるような視線を送り、もう一人はなるほど、といった様子でこの場に似つかわしくない登場者を見定める。残りの二人はどうやら不意の侵入者のことは知っているようで、笑っており、一人は呆れていた。

「おかえり、我が同志。さあ成果を聞かせてくれ」

「……その前に玄関が聞きたいものです」

不意の侵入者であり、この場に失礼な登場な仕方をしてしまった私は、麻袋の重みに辟易しながら、そう答えた。

「で、同志よ。例のモノは？」

今一度仕切り直し、私の上司でもあるこの場のトップの彼から、私は進捗状況を問いかけられる。私のせいで汚れた室内を清掃し、五角形のテーブルに皆が再び座りなおる様は、ある種のシニールさを孕んでいたのは口が裂けても言えない。腐つてもアウトサイド五都市のトップがすることではないからである。

「例のモノはこの中に、私の仕事はここまでなので必要なことだけ説明させていただきます」

ます」

「少し抵抗されたので麻袋に放り込んでありますが、意識はあります。『Green』だと遅すぎるので『Fast Green』を使って尋問なりどうぞ、と言った感じす」

私は淡々と依頼された仕事と、その後のケアの仕方だけを報告する。

「ふむ、『G』という旧世代の『肉詰』でいいのかな？ 私の方では未だに『FG』は実用には程遠くてね」

「ははは、『FG』はただただ早く治って痛いだけです。まあ一分たらず致命傷が治ってしまうのは『G』との違いですがね。ですが『FG』も素晴らしいもので——」

私の上司と、私たちのすむアウトサイドと逆方向のアウトサイドに住むトップが、

『FG』と『G』の違いについて何故か語りだしてしまった。『FG』と『G』、これは行ってしまう医療用品である。『G』はもともとグリーンと呼ばれており、一年前に目の前で殺されたアウトサイドのモノが使っていたものである。人体の細胞の活性化を促し、液体内に存在するナノマシンが損傷箇所を把握し、そこに作用させるというものだ。それ故に一部では『肉詰』という身も蓋もない名前が付けられているのだ。

『FG』だが、これは私が受けていた急速治療のことから『G』を改良したものであり、Fast^素_早^いという特性を付け加えたものだ。その文字通り素早く治療可能になった『G』である。ただ唯一の欠点は急速治療では抑えられていたその速度を、限界まで引きだし

てしまったことだろうか。そのために人体の限界を越えたスピードで治療が可能になった代わり、激痛が伴うようになってしまった。それは本来デメリットであるのだが、私たちにとっては好都合でしかなかったというのも、面白い話である。

「——というわけで我らの技術は……」

「あー……その、なんだ。話はまた今度にしてだな。とりあえず、だな」

「おっとすまない、つい熱くなってしまった。わははは！」

「……元氣」

「ちよつとやかましいかな」

「同じく」

……本当にこの人達はアウトサイドをまとめ上げている人材なのだろうか？

「じゃあ、私はこのあとも仕事があるので。失礼します」

「ああ、助かったよ。ではまたいずれ、な」

「ええ」

私は机の上に麻袋の中身を放り出し、特に確認もせず麻袋を手を持ったまま会議室と思われる部屋を、今度こそ扉を通り出ていく。初めて気が付いた事だが、この扉は見た目より分厚く、軽くノックしてみてもわかつたのだが中に鉄板のようなものが仕込まれている。流石アウトサイド、備えあればというやつか。

「おや、仕事は終わりましたかな？」

私が扉を出てすぐの右手に怪しげなロングコートを羽織り帽子を深くかぶった、いかにもな外見をした、仕事仲間でもあり私を一年前に拾ってくれた掃除屋が立っていた。

「掃除屋か。どうかしたのか？」

「このあと少しいいですか？ 間もなく起こることについて」

「ああ、それより早くいこう。ここはすぐに騒がしくなる」

「……ああ、なるほど。今日は二人でしたか」

「だから余計、な」

私が暗い廊下を進みだすと、彼も道案内と言わんばかりに先を歩いていった。いくらか歩いたところで、私の運んできた荷物の声が、静寂に包まれた廊下を大きく震わせた。

「……それで、来るべき日のことなのですが」

私と掃除屋が例のビルを出た後、向かった先はどこにでもある……いや、アウトサイドには数える程しかないバーにやってきていた。店内は小洒落た雰囲気、装飾と一昔前のジャズ、そして店内に蔓延る私たちを含めた客の喧騒に包まれている。

「何度も言っていると思うが、その日は私を含めた少数精鋭で任務が行われる」

「そのことは重々承知しているのですが……少しいいでしょうか、これを」

そう唐突に小声になった掃除屋は、懐から一枚の紙の切れ端のようなものを私に手渡して来た。紙は破られたのか燃えたのか、又は両者なのか酷くボロボロな状態だ。軽く目を通すと、そこには不可解としかとれない内容が書かれていた。

「……………これは？」

「この紙はつい先日、貴方とは関係のないはずの任務にあたっていた時に回収した幸福都市の参考人が持っていたモノです」

「なら……………なぜ私の現在の情報が載っている？」

その不十分とも言える紙面から確認できる範囲だけでも、どうみても私としかいいようのない何時とられたかもわからない写真と、私のデータが載っているのだ。

「それはこつちが聞きたいくらいですよ。それに聞こうにも残ったのはそれ一枚ですから。他は全部ふつとびましたし」

「……………よく残ったな、これだけ」

「確かに、神の悪戯としか」

私は受け取った紙をそのまま懐にしまいこみ、溜息を吐いた。一瞬だけ掃除屋の方を見て見るが、表情や雰囲気からは何も感じ取れない。一年たっても変わらないものだ。

「じゃあ何か？ 私たちの近くにネズミでもいるのか」

「さて、流れ者ばかりですしな」

「それを言うとは、一番私が疑われるのだが」

「その通りですね。だからこそ貴方にこれを渡しておくのです」

「……お前に掃除されたくはないな」

「私だって貴方を相手にしたくないですから」

またしても溜息、今度は二つ分。私と掃除屋はどちらからでもなく、目の前に置かれていたグラスを煽る。丸氷で程よく冷やされた酒は喉を勢いよく飲み干していくと、通つていった箇所から痛みにも似た熱が脳に送られる。この程度で私も掃除屋も倒れはしないが、決して普段からしているわけではないので、少しだけ効いた。掃除屋の方を見ると少しうなだれており、何か思い詰めているかのようだった。

「では、次会うのはいつでしょうか」

「……もしかしたらもう会わんかもしれないな」

次の任務、来るべき日がくれば私の命は保証できない。それほどに危険な任務だからだ。

「やはりですか……。なら、餞別にこれを」

掃除屋は仕事着のロングコートの懐を漁ると、私の腕ほどの長さの布に包まれたものをテーブルに差し出してきた。

「今日はサプライズが多いな。これは？」

「貴方の義手に合うように作らせた特注のナイフです。前腕部の箇所に装備可能なものになっていきます」

「ふむ。数日前にメンテナンスした時に、スライドが追加されていたのはそういうことか」

私は少し気になり、義手の部分を確認する。人工皮膚で覆われているために一見ではわからないが、触れてみると確かに前腕部分に何かをはめ込めそうなくぼみが確認できた。

「軽さも行動の障害にならないように配慮、殺傷力を意識してダガーの形に。気持ちとしてはお守り程度ですが、相手の意表を付くには十分かと」

「面白そうだ。手は多くても困らないからな」

私はテーブルに置かれた布に包まれたナイフを手に取り、店の中では出すわけにもいかないでロングコートの開いているポケットにしまいこんだ。

「ありがたかったです。それに掃除屋、私は死ぬ気は毛頭ないぞ」

「ならよいのです。私としても仕事仲間を失うのは心が痛い。ましてや私が見つけた逸材ですから」

「……道具としてなのか友人としてなのか一年たつても図りかねるよ」

「どちらでも正解ですよ。大切なことに変わりはないのですから」

「……ふん」

「まあまあ、今日はまだ飲めますよね？ 時間もあることですし」

「……もちろんだ」

私と掃除屋は、夜が明けるまで飲み明かした。まるで別れが近いことをお互いが理解しているからこそ、出会ってからの一年を再確認するかのよう。だが私の頭の中ではずっと、一枚の紙の切れ端の内容が離れずにいた。

日は変わり、掃除屋と飲み明かした夜から一週間が経っていた。私は仕事後に与えられていた休暇を終え、またしても新しい仕事のミーティングにやってきていた。新しい仕事と言っても、例の来るべき日のことについてであり、私としては上司に嫌という程聞かされているので今更行きたくもないのだが、仕事だから仕方ないと割り切ってきている。

やってきたのは一週間前に一度やってきた、どこまでも深い漆黒をたたえる例のビル。以前不法侵入紛いの方法で入ったため、今回はキッチンと前回わからずじまいであった入口を聞いてからやってきている。

「……」

私が向かったのは指定されていた最上階の、更に最奥の突当りの部屋。仰々しく備え付けられた二枚からなるかなり分厚く見える洋風の扉をノックし、反応をうかがう。そして静寂と外観通りの暗闇の中には私が叩いた扉の金属音にも似たノック音以外、何も帰ってこない。

「襲撃か？」

あまりの反応のなさ、異常な静けさに私は普通ではないことを察する。なにせアウトサイド、何があるかわからないのが醍醐味なのだから。私は全身の稼働を確認し、義手の調子を見る。装備も問題なしだ。

「……………ふう」

私は息を吐き、息を吸い、息を殺す。扉は押すタイプの物、物音が立たないように慎重に開けようと力を入れる、が。ほんの少しの異音、重み。これは……

「トラップか」

扉を開ける前に、何かが目の前に勢いをつけて現れる。私は他に逃げる場所もなく、もう一枚の扉の影に身を隠す。避ける寸前に把握したがどうやらショットガン・トラップであったようで、私が身を隠した数拍後に鼓膜を切り裂くような轟音が一帯の静寂を破壊した。わざわざトラップが設置されているという事は、ここは既に抑えられていると考えるべきか。

私は右手でスーツの裏側に隠している、手のひらサイズの球体を取りだす。その間に左手で義手である右手にある小型ディスプレイを起動。その後扉の向こうへ球体を投げ放つ。扉の奥から人の気配と、物音は聞こえない。近づけば気が付くかもしれないが部屋の中を把握せずに突入は死にたがりである。

私が投げ放った球体は音を立てながら転がっていき、部屋の中央に届くと思われる辺りで突如破裂した。私がやったわけではなく、中の賊がやったと思われる。

「……手間がはぶける」

私は球体の破裂を確認した後、淡く光る右手のディスプレイを覗き込む。そこには破裂瞬間の全方位写真に、破裂時の音の反響を利用した部屋の簡易図が表示されている。ネズミが左右に2匹、室内に他の生体反応なし。部屋は四方壁、こちらにのみ扉。障害物は私の方から見て右手に事務机に事務椅子で、その影に一匹。左手には何か壁の様な物が一枚、もう一匹を匿うように展開されている。

「……………ふう」

一呼吸、問題なし。私は、部屋へ踏み込んだ。

室内に立てこもっていた二人は、間違はなく焦っている。予定通りではあるが、それをどうとればいいのかわからなかったからだ。部屋を守ってくれという依頼、本来なら

何事もなく終わるはずであった。突然の訪問者がいなければの話だが。

万全を期すために設置された罨、一つは扉のショットガン・トラップだったが、それはあつけなく看破されていた。更にもう一つとして室内に設置されたセンサー式と加圧式の両方を使用したフロア・トラップ。仕掛けを把握している者以外ではまずかかる、室内に敷き詰められるように設置された重さに反応する加圧式のもの、床以外の空間を通過するものに反応するように設置されたセンサー式のもの二つである。その二つは補うように隙間なく、部屋の四方に置かれた制御装置で管理されていた。反応すれば最後、生物なら瞬間で蒸発するほどのレーザーが四方から遅いかかる。まず間違はなく人どころか虫の一匹も接近させない完成度だ。

二人には絶対の自信があつた、二人で失敗したことはなかつたからだ。二人で作り上げ、二人で仕上げ、二人でこなしてきた仕事という名の人生の象徴。さながら人生の輝きを結晶化した、二人で一つの光。だがその慢心が、安心が、不変が、付け入る隙を作ることを、二人は知らない。どんなに神々しく輝く光であろうと、等しく容易く暗き闇に呑まれることを、二人は知らない。人の生の儚さを、二人は知らない。

「……………」、こころさないで、やめてくれ——」

「……………無理だろう、ふざけるなよ」

部屋の四方で点滅を繰り返す白色の発光を受けながら、私の目の前では鮮烈なほどの赤色が噴出してゐる。人という器から溢れる噴水は、二つ。一人は呆気なく死んだ。首から上がその下の胴からずれた際の表情に曇りはなく、羨ましいくらいさぞ幸せに逝けた事だろう。もう一人はその事実には恐怖しながら死んだ。哀れにも股座から糞尿を漏らし、情けない事に命乞いもした。そんな腑抜けを私は仕方なく始末した。

「……出てきたらどうだ。出てこないのなら——」

「おつとストップストップ。いやおかしいなあ、生体反応も電気反応も飛ばしてたはずなのに」

「漏れているからだ、殺気が」

「おや、頭にホイルでも巻いとくべきだったか」

「お花畑の中にケシの花でも咲かしているんじゃないのか？」

そしてゴミ二匹の始末の際に気が付いたのが、指定された室内にはゴミふたつ以外に何も無いことと、更に妙な手ごたえのなさ。そして五感にも機械にも反応がでなかった、直感にも似た違和感。その答えはこの場に似つかわしくない、生きた人間。

唐突に眼前に現れたのはどこまでも闇を吸い込むかのような白を衣にして纏った、長身でありながら太さはなく不健康に近い痩せ型の人物。無造作に伸ばされながら丸みがかつたカーブを描く長髪と、瞳を覗かせない光を拒む標準よりも一回りも大きい眼

鏡。

研究者のような出で立ちの者は、まるでスイッチを切り替えたように、何も無い空間に私の感覚にその存在を察知させずに、瞬間でその姿を浮かび上がらせたのだった。

「いやあ、次の仕事はみんなでするつて君も聞いただろう？　なら自分の背中を預けるのに足る人物か確かめたいだろう。別に死んだら代わりを探すだけだ、私には時間の無駄のほうが目手だからね」

男はやや自嘲気味に笑いながら、不快な笑みを浮かべつつ話を続けていく。

「そのために用意した餌も、これじゃ形なしだ。流石だねえ、来るべき日の任務に選ばれるだけの事はある！」

「そうか、ならお前は……」

「そうそう、軽く言っとくとアウトサイドの五本指に当たると自負する技術者の一人つてわけ。これからよろしく？」

「……ならば避けてみる」

「へ？」

私はへらへらとした笑みを浮かべながら目の前の相手が自己紹介をしている隙に、義手に装着されていたナイフを腕を振りぬく形で射出。一呼吸も許さぬまま、相手の額には長方形の空洞が出来上がっていた。実に三度目の赤色が噴出、するはずだった。

「おいおい、やめてくれよ貴重な装置を使わせないでくれ。今ので三つも使ったんだ。損失で言うならアウトサイドの労働力一週間分くらいだ」

背後からやれやれといったような不快感を伴った声が聞こえると、三度目の噴出は私の目の前から文字通り、微塵たりとも痕跡を残さずに消滅した。

「……流石といったところだな。何をしたかは想像が付くが、それだけの技術がこの場にあることが恐ろしいな」

「これでお互いおあいこにしようか？ 私とて死ぬのはまっぴらだからね」

相手の言っていた三つは確実に、『加速』『認識阻害』『実体映像』だろう。『実体映像』を除く二つは、アウトサイドではまだまだ発達途上の技術だ。『実体映像』だけはアウトサイドと幸福都市の間に常備されているが、個人レベルでとなると話が違ってくる。どの技術も未だ個人レベルの規模で確立されていないはずだと、そう私は認識している。

「悪かった、よろしく頼む同志よ」

「ああ、こちらこそよろしく頼むよ同志」

私は目の前に現れた者を、志を同じくするものとして握手をした。普通ならば警戒してしかるべきの眼前の人物ではあるが不思議と彼を同志と認められたのは、アウトサイドに一年もいると不思議とわかるようになっていたからとしかいいようがない。陽だまりの匂いと、暗き時の匂いの違いが。

「あ、そうだそうだ。ちなみにさっきのふたりは私が捕まえてきた表の奴等だから、気にしないでくれたまえよ」

「やはりか。手ごたえがないわけだ」

「そうだねえ、私が捕まえてこれる程度のもものだから。ちなみに君以外の残りのメンバー……二人にも同じことをしているんだが」

妙に饒舌に、そして興奮気味に目の前の彼はベラベラと喋りつづける。どうやら目の前の彼は、相主にネジが飛んでいる。さながら現代のフランケンシュタインナーだ。

「正直に言つて驚いた。君も含めて三人とも私のテストを悠々とクリアした。満点どころか完璧だ……バラしたいくらい」

「バラすのは構わないが、残りの二人はどこに？」

「いいのかい？ それなら本気出すけど」

「冗談だ、はやく残りの居場所を——」

轟音。そして異常が、私の視覚と聴覚を刺激する。私が彼と軽くじゃれているところに、あまりにも唐突に私と彼の間の空間に何かの欠片と私たちの身長と同じサイズのもの、飛翔していた。

「ああ、隣で待機させていたのに……私ごと突っ込んできた」

「イライラするなあイライラするぞイライラしてきたなアアア！ クソ眼鏡、捻つて

やるぞオオオオオ！」

「凄い怒ってるんだが」

どうやら私たちの目の前を飛翔していったのは、『実体映像』の分身体であったようだ。目の前の彼はやはりこうなったか、と言わんばかりに頭を抱えている。そして咆哮しながら隣の壁を破壊し登場したのは、白衣の彼の口ぶりからすると、もう一人の同志であると思われる。

体躯はどうみても私や長身の彼よりも一回り大きく、人よりも先にゴリラや動物を連想させるような雰囲気醸し出している。衣服はこれでもかというくらいに筋肉に張りつめさせられており、更にその筋肉を覆う皮膚には彼の人生を物語るかのような多くの生傷。その嘘のような体躯を操る頭部も生傷に覆われており、獣のようにぎらついた双眸も全体の迫力を後押ししている。

「まあ落ち着き給えよ同志、こんなところで死体は見たくないだろう？」

「クソ眼鏡が二匹だと？ これまでで一番イラつく事実かもしれないねえなアアアア！」

私を除け者にして、不意の侵入者と白衣の彼はお互いに睨みをきかせあう。誰がどうみたって爆発寸前、さながら火薬庫だ。

「二人とも落ち着け、私たちは任務を同じくする同志だろう。先に仲間割れしては元も子もないだろう」

「ああ？ 何だお前……つて見たことあるなあ！ お前、一年前のシヨンベンくせえ新入りだろ！」

その一言で、私の中でカチリと音を立て、ナニカのスイッチが入る。

「……なぜ知っている」

「どうもこうも、お前が腕ふつ飛ばされてもたついていたところを俺が助けてやったのさ！ あの時のお前は傑作だったなあ……ハハハハ！」

更に私はその一言で、記憶の一片に止まっていた男の姿を思い浮かび上がらせた。そうだ、コイツは……私が本気で殺そうとした時に邪魔した奴だ。

「……殺してやる理由を思い出した。そうだな、四肢でももいで路傍に晒してやろうか？ 安全という名の餌で肥え太った豚」

「へえ……イライラさせるなあ……まとめてお前ら捻ってやらアアアアア！」

咆哮、そして突進。私が臨戦態勢を取り、白衣の彼も視界の端で何かを始めだしていた。同志だろうと知った事か、私一人だろうと任務は必ず遂行できる。殺す、任務前の体ならしだ。

「捻り潰す！ ゴミがアアアア！」

「……ふざけるなよ、貴様みたいな脂肪にやられるか」

「二人とも、揃ってサンプルになつてもらおうか！」

「そこまでだ。『止まれ』」

私たちがまさに衝突しようとした、まさにその瞬間。ぶつかり合う寸前の三人の体は、その三人のものではない言葉通り、硬直していた。

「何ッ!？」

「……止まった、だど?」

「まさか……これは……」

私たちは先程までの衝動が嘘のように、動作の途中で身じろぎ一つできずに硬直していた。何が起こったかも、何をされたのかもわからないまま。ただわかったのは、突然に現れた一人の言葉によって私たちは行動を制限されたということ。

「つたく……隊長も楽しやねえなあ。ジジイの野郎、面倒押し付けやがって」

その男は気だるそうに、整えられた美しい黄金色の長髪を、もったいなさなど微塵たりとも感じさせずにくしゃやくしゃとかき乱す。その手の動きには明らかに苛立ちと不満がこもっているようで、徐々に激しさを増しながらその男大きいため息をついた。

「なんだこれはア……お前の仕事か? 奇妙な術を使う……早く解け、さもなくば」

「さもなくば、なんだよデ(カ)ブ(ツ)」

「……イライラすらアアアア殺オオオオす!」

巨大な体軀をした男は、全身に貼り巡っているであろう目に見えぬ拘束をなかば強引

に解除しようとしているのか、全身の筋肉を震わせながら徐々に行動を可能にしている。

「へえ、俺の『言葉』をそんな力技で解くか。ならもういつちよいくか、『止まれ、止まれ』！」

「ガアアアアッ……この程度で俺を縛ろうなどオオオオオ!!!」

拘束を強化されたのか、またしても止まりつつも男は獣のような方向をあげる。金髪の男はその様子をみて高らかに笑いながら、これでもかと凶悪な笑みを浮かべている。私と白衣の男はその人外じみた光景を見ながら、ここは行動しないでいたほうが得策であると判断しお互いに見合ったまま動けずにいる。

そんなこう着状態から動き出したのは、金髪の男。

「じゃあ遊びもここまでだ、大人しくしてもらおう。『止まれ、足よ腕よ胴よ頭部よ』！」

「ガッ……がアアアア!!!」

「ああ、うるさいことだ。『口よ閉じろ』、これで終わりだ」

「~~~~~!!!」

金髪の男は続けざまに意味ありげな言葉を、巨大な男に吐きつづけていった。結果としてその言葉に一部の狂いもなく、男は地に伏し声も上げられずにいた。最後の抵抗とばかりに視線だけが金髪の男を食い殺さんとばかりに睨みつけているが、その視線も最

後には男の『閉じろ、瞳よ』という言葉によつて閉じられた。

異常、不可解、意味不明。頭の中では必死に状況を飲みこもうとするも、言葉通りの出来事が起きている、それ以外はわからない。ただただ、目の前の出来事に圧倒されるだけ。

「はあ、疲れた疲れた。二人は普通そうだから……『解除』」

「おおつと、ようやく動きました。あなたはもしかしなくても『超越者』、でしょうね」

体の拘束が解けると同時に、白衣の男が笑みを浮かべながら口を開いた。超越者——一度だけ聞いたことがある。人の身でありながら、人を越えた能力を持つ者……世界に数える程もないという、人類の到達点。

「やめてくれ、そんなかつたるい名前。俺は——」

「……さつき隊長といったがそれは」

私にとって、名前や超越者などはどうでもよく、それよりもこの男が敵かどうかが重要だと考えた。それほどまでに、この男は脅威であると。

「ああ、俺がお前らの隊を仕切る……そして、来るべき日の任務に当たる四人の一人」

その男は私と、白衣の男、そして巨大な男に歩み寄りながら、私が遮った続きを、その名を高らかに唱える。

「レオン……ただのレオンだ。よろしく頼む」

幸福の価値 中編3

「はい、みんなかんぱーい！」

一つのテーブルを囲み、一人はノリノリでジョッキを掲げる。残り三人はジョッキどころか、各々武器を握り締めている。

「……『掴んで、手を上げろ』、仕切りなおしてかんぱーい！」

ほぼ強制的にグラスをつかまされ、手が上がる。四つの衝撃音が、雑多とした人々の喧騒に飲み込まれる。必要なことだけ言うならば、私たちはいわゆる居酒屋と呼ばれる場所に連れ込まれていた。『俺についてこい』という言葉に従って。なぜこうなった。

時は少し遡り、例のビルの一室。部屋には穴が開き、四人の人間と死体が二つと誰がどう見たつて異常な現場に私たちは居た。そこに突如として現れたのが、

「レオン、ただのレオンだ。よろしく頼む」

レオンと名乗った彼は、私と同じくアウトサイドでは見慣れた黒いスーツをバックにして、獅子のように整えられた黄金の髪を煌びやかにびかせこちらへと握手の意味をこめた手を差し出していた。

そんな彼が屈託のない笑みを浮かべ、催促をするように小刻みに揺らしながら差し出された手を私は右手で振り払う。

「……へえ、そんな気にいらないか？」

「違う。ただ信用ならないだけだ。同志であることは重々承知だ。そのゴリラも、眼鏡も」

「なんか酷くない？」

「~~~~~!!!」

私は白衣の男、眼鏡をかけた技術者と名乗った男と、芋虫のように床にはいつくばっている、一年前に私を助けたと豪語する巨軀の男を一瞥しながらレオンを睨み付ける。

「まあな、俺だつて信用ならないさ。ここはアウトサイド、流れ者と廃棄されたやつらの街だからな」

レオンはわかっているとも、と言わんばかりに大袈裟に手を広げながら続ける。

「だからといって信用できないつてわけじゃない。共通の目的さえあれば、敵だつて見方だ。そう思わないか？ 元幸福都市の坊ちゃん」

コイツ……やはり私たちの情報を。もしやコイツが掃除屋に渡された、私の情報のがせられた紙片の持ち主か。

「ああ、信用できないわけじゃないな。だが協力してやるとも言っていないだろう」

お互いさぐりさぐりの牽制をしつつ、様子を伺っていると、

「めんどくさい！ 君ら凄くめんどくさい！ 付き合いたてのカップルみたいなもぞがゆい会話はやめてくれ！」

傍観していたはずの白衣の男がオーバーリアクション気味に体を掻きむしりながら、私たちの間に割っては言ってきた。

「……黙れ眼鏡、今度こそ風穴を開けてやろうか」

白衣の男は私が右手を振り上げると、降参と言わんばかりに両手を上にあげた。

「おお、怖い怖い」

へーへーと白衣の男は頷きながら一歩後ろに下がり、やれやれと言わんばかりに首を傾げる。その様子を見て、私もどこか熱くなっていたことに気が付き、一つ溜息を吐いて、

「……まあ、俺も協力してやろうとか思っちゃいないさ。別に一人であって出来ると思うしな」

「ならば、各々バラバラでやればいいではないか」

私ややや嘸みつくように言うと、レオンはやれやれと呆れながら、

「そもいかないのさ。この任務は一度しくじれば私たちの存在も、計画の意図もあちらに割れてしまう。そうなればアウトサイドが幸福都市を退けることは難しくなるだ

ろう」

「だが、技術力などは上だろう。警戒しすぎではないのか」

私は言っていないながら、自分が一番幸福都市を警戒していることを自覚していた。脳裏に過る、三人の影。どれも維持権という不透明なモノを持たされ、人の生殺与奪を握った者達。そしてその幸福都市のトップに立つ……『N』という謎の人物。そうだ、私たちは幸福都市のことをまるで知らない。何十年と過ごしていたのにも関わらず。

「しすぎ、なんてことはない。むしろしすぎて然るべきだ。だからこそ少数精鋭かつアウトサイドが損失として限界に計上した、私たちが向かうのだ」

「そういうからには、少数精鋭かつ軽度の損失でしかない私たちでもこなせるプランがあるんだろうな」

「口が減らないな。まあ、これくらいが俺としても歯ごたえがあつていいんだがな」

お互い探りあうような、それでいて不穏感を孕んだ会話。だがそこには、お互いに譲れないところがある。己の意思と、アウトサイドの意思。どちらも私たちには譲れないモノがあるのだ。

「ああ、もう。いいから二人とも。なんで一番ずれてるはずの私が仕切ならきやいけなんだ」

ずれてる自覚があつたことにも驚きだが、白衣の男は私とレオンの間に今度は物理的

ではなく会話として仲裁に入ってきた。彼もどうやら不毛とも取れる時間に嫌気がさしたのだろうか。

「まあ、その通りだな。おい『起きろ』。『口は開いていい』から。あと変な真似したら今度こそ本気で行くぞ」

「——ッ！ フウウウウ………本当なら殺してやりたい所だが、気が削がれたなア……」
「おう、それでいい。いつだって殺しにこい」

レオンはどうやら『言葉』とやらで巨躯の男を縛っていたモノを解除したようで、男は不機嫌そうによろよると立ち上がる。どうみても、やる気ではなく体力が根こそぎそぎ落とされている。口だけはどうあつても減らないようだ。

巨躯の男の解放を皮切りによろやく険悪なムードが一段落し、さあ誰が口を開くかといった雰囲気私たちが包む。現に私も先程よりは落ち着きを取り戻せていた。

そんな中、「あつ」と何か思いついたように口火を切ったのはレオンは、

「そうだなあ、任務までそう時間もないし……折角だから隊長命令的な感じで、今から親睦会でもするか？」

なにがそうなのか、全くわからない一つの提案が私たちの出会って間もない心をシンクろさせた。

「はあ？」

「拒否する」

「馬鹿かお前はア……っ？」

シンクロした心から三つの拒否反応。どうにも気まずい空気が私たちの空間を包む。さつきまでのギスギス感が生易しく感じられるほど、着火寸前、一触即発険悪ムード。

「よしお前ら、『俺についてこい』。それで今から親睦会するぞ。もちろん拒否権はないから『口は開かなくてよし』！」

「——！！——」

レオンが高らかにそう宣言すると、私たちは一言も話さず、一寸の狂いもなく、レオンのあとを規則正しく、有無を言わさないままについていかされることになったのだった。

これが、ほんの少し前の話。思い出しても頭が痛くなる。

「はいじゃあ親睦会ってことだから、自己紹介していこうか、まずは俺から！」

私たち三人に話かけながらも、私たちの意思はまるで無視してレオンはウキウキした様子で自己紹介を始めだす。

「名前はレオン、つても偽名ってかある意味本名なんだけだな。出身者はアウトサイド

セクター5だ。趣味は特にないが、特技は頼み事、かな？」

レオンは私たちが興味無い素振りをしているのにも関わらず、一人でペラペラと自己紹介を行っていった。どうでもいいが特技がどう考えても、私の知っている頼み事と乖離していると思われる。

「じゃ、次は……お前！ 名前わかんねーからお前！」

レオンはめげる様子もなく、次を指さして指定する。その指先には、巨躯の男の姿があった。だが巨躯の男は、まるで聞く耳持たずと言った様子で厳かに座り続ける。

「……おい、お前っていつてんだよ。わかる？ オーケー？ 言葉わかる？」

「殺すぞ」

「あ、そういうこと言っちゃおう？ じゃあそうだな……『服脱いで』、『踊れ』」

「何イイイイ!? クソ、生まれエエエエ！ ウオオオオオ！」

……なんなんだこれは。私は別にゴリラの裸踊りに興味はないし、それよりも店内の客とスタッフの視線がとても痛い。早くやめてくれないだろうか。

「……名前はなし。流れ者の親から生まれたとだけ聞いている。出身は一応セクター2、趣味はトレーニング、特技は破壊だ」

ひとしきりレオンが満足したところで、解放された男はやや苛立った様子で早口に自己紹介をしていった。私はこうならないようにしましょう、ゴリラでも役に立つな。

「なんだ、微妙に重いな。でも特技破壊って……ぷふっ、見た目通りすぎて……」
「やっぱり殺しとくかお前エ……」

巨軀の男はもう逆らうのも面倒になっていいのか、妙な落ち着きを持って自己紹介を
していった。レオンは特技に対して笑っているが、自分も大差ない事をわかっているの
だろうか？

「よし、じゃあ次は……眼鏡の君！ よろしく！」

「はーい。私も名前という名前はないから、適当にどうぞ。出身は技術力随一のセク
ター4。趣味は研究、特技は分解かな？」

「うわっ、すげえ普通だな。というかここまで名前あるの俺だけかよ」

白衣の男は少しでも抵抗をすればレオンに何をされるかわからないことを先程のこ
とで察しているようで、当たり障りのない普通の自己紹介をした。この流れだと、次は
私か。

「はい、次！ トリだよ！」

「はあ……名前も私もない。出身は一応幸福都市だ。趣味も特技も、特にない」

私は特筆すべきことが自分ないことを考えながら、至極普通にそれでいて適当に自
己紹介を済ませる。

「……お、おう。なんか重いな」

「幸福都市かあ、色々気になるなあ……」

「ケツ、やつぱり出身は幸福都市かよ。俺の嫌いな平和ボケした匂いがするわけだぜ」

それぞれが口々に反応するが、私からしたらどうでもよかった。それよりも今後のことだ、と思いつつ口を開く。

「なんだっていいだろう。それより自己紹介はもういい。レオン、これからどうするんだ」

「まあ焦るなよ、話はまだこれからだ」

私の追及に対し、レオンは私に右手をかざして制止をかける。

「おーいすみませーん店員さーん」

「はーいー！」

レオンは私の質問に答えることなく、店の中を忙しそうに動き回る店員を呼び止めた。

「えっと、店で一番強いやつもってきて？ あ、酒の話ね」

「……えっと？」

店員も、口を噤んでいる私たちも揃って頭にハテナを浮かべている。この馬鹿は何をしているのだ、と。

「だ、か、ら。一番強い、銘柄とかなんだっていいよ」

「は、はい！ かしこまりました！」

「よろしく」と気の抜けた声を店員に送ったレオンは、再びこちらに向き直って無邪気な笑みを浮かべた。ああなるほど、コイツは……

「さあ、親睦会はこれからだぜ？」

この先起こるであろう飲み会（しんぱくかい）に、私は頭を痛める羽目になるのだった。

「……もう無理い。センサー？ これ次のけんきゅー……うおえええ」

「すーっ……ふうーっ……」

それぞれ穏やかな呼吸音を奏でながら、私とレオンを除く二人はすっかり泥酔していた。それも仕方がない、眼鏡は酒に強くない様子であったし、ゴリラはレオンと飲み比べをして十杯目を飲んでいいるのだから。

「うーん、まだまだだなあ。俺を倒したけりやこの三倍はいるぜエ……」

「の割には、随分とよろよろだがあ？」

大きく息まくレオンだが、彼とて飲み比べで決して少なくない量を飲んでいる。現に頬は美貌がもはや色気づいて見える程に紅潮しているし、呂律だつてあやしい。仮にこれを女性に例えると、とてつもない破壊力であるとだけ言っておきたい。

「おい！ お前もつと飲めよオ……うぷつ」

「悪いな、私は次の日に持ち越さない程度しか嗜まないんだ」

そして私は彼らのどんちゃん騒ぎを横目に、テーブルに運ばれたもはや強すぎる度を越えた酒をちびちびと飲んでいった。それでも少し酔ってしまったが、彼らほどではない。

「うう……わりいもう動けねえんだ」

「ほう、それは好都合だ。ん、酒がうまい」

私は弱々しく声を漏らすレオンを一瞥し、正直少しだけ気が晴れた。あつて間もないが、弱った彼を見るのはどこか気分が良い。

「いいか、一つ言っておく」

私がグラスをゆつたりとあおっていると、レオンは始めて見るような真剣な面持ちと、どこまでも真つ直ぐな視線をこちらに向けながら口を開いた。そして続けて、

「吐きそう、それも大量に」

「店の中でそれは困る！」

何とも不幸なことに常識を持ち合わせていた私は、急いでレオンを抱えて仕方なく外へと連れ込んだ。

「オロロロ……」

「クソ、なぜ私がこんなことを」

私は今にも吐きそうなレオンを半ば放り出すように路地裏に放つと、雑多としたゴミだらけの中にレオンは埋もれながら苦悶の声を漏らした。続いて素晴らしいくらいの水音が、私の耳に不快感として聞こえてきた。

「……………」

「ん？　おい、死んでないだろうな？」

先程まで潔い程の耳障りな音をならしていたレオンは、ピタリとその音を止めたかと思うとピクリとも動かなくなっていた。まさか喉にでも詰まらしたか？

ここで死なれても気分が悪い、そう思いながら私はゴミに埋もれたレオンの安否を確認しに行く。

「おい、おい！　つたく……………」

揺さぶつても反応が無いレオンを、抱え上げて死んでいないかその顔を確認しようとしたその時、

「……………」 『動くな』

彼の口から聞いたこともないような、氷点下の眩きが私の耳に届いていた。

「ぐっ…………レオン、何のつもりだ。酔っぱらってるなら…………」

私は石同然に動かなくなつた体を必死に動かそうとしつつ、抱えていたレオンに問いかける。だがその声にレオンは答えることなく、自然すぎる程にスツと立ち上がる。

「……ようやく油断したな。俺はお前に聞きたいことがある」

そこには、見たこともない彼がいた。

「どういうことだ」

私も警戒しながら彼に問うが、その雰囲気は今までのどこか優し気な彼とはかけ離れていた。きつと今の彼は『敵』を認識している、そう思わざるを得ない。

もはや疑いようもない、レオンは私を嵌めたのだ。馬鹿でもわかる、この状況と拘束から。そして彼の、先程までとは別人に思える程のその佇まいに。

「初めからお前のことは疑っていた。理由は言うまでもないだろう」

レオンは問い詰めるように、屈んでいる私を見下ろすように冷たく言い放つ。私は反射的に全身に力を入れるが、レオンの拘束が効いている今、どうしようもないのが現実、ぐつと彼を睨み付けることしかできない。

「それと君ら三人のこと、調べはつけているんだが……それは君も知つての通りだと思ふ」

レオンがビルの中で『幸福都市出身』と言つた段階でそれはわかつていたが、問題なのはどこまで調べていたかだ。もしそれが、文字通り全てなら……。

「君と話し合うために眠ってもらった二人は、アウトサイドでは普通すぎる出自だったよ。君に比べたらね」

私は眼前の出来事に思考を巡らしているのにもかかわらず、この状況が未だに飲み込めずにいた。その間にも、レオンは続けて私に語り続ける。

「君については苦勞したよ。情報を集めるためにわざわざ幸福都市に危険を冒してまで調べに行ったりね。視察も兼ねてジジイに行かされていたから、なんてことはなかったけど……不思議だったよ」

何か、何か漠然とした不安。まるで私というものが、ことごとく否定されているかのような。

「何が、不思議なんだ」

ただ私には、漠然とした悪寒だけが心中に渦巻いていた。そんな私の胸中をレオンはお構いなしと言わんばかりに続ける。

「ないんだ、君のデータが」

レオンが口にしたのは、私にとっても意味がわからない……いや、わかろうとしたくない一言だった。

「幸福都市に暮らす者達は生まれながらにして戸籍としてデータベースに纏められているんだ。君も管理局にいたのなら知っているだろう？ ある程度アクセス制限はある

ものの、君程度なら一般の人と同じく閲覧できるはずなんだ」

「だがそれがなかった。管理局で閲覧できるデータベースには少なくとも、だ」

私は何も言えなかった。そして一つの疑問といくつもの不安が、心の中によぎつていくのを感じていた。

「つまり君は、正体不明^{アンソウ}。幸福都市にも、ましてやアウトサイドでも所属していないどころか生まれから経歴まで何もかもが一切不明。どういうことか、もし出来るなら説明してもらいたい」

「そ、そんなもの……」

不安、私は両親の下で生まれた筈。そして育つて……両親？　どんな顔だ、名前は？　じゃあどこに住んでいた？　それは幸福都市の……幸福都市のどこだ？　じゃあどうやって、私は生きていたんだ？　わからないことだけがわからない。ハッキリとわかるのは、私の運命が変わったあの日からのことだけ。それは、何故だ？

疑問、私は一体何者なのだ？

『君は……そういう人間なんだよ』

脳裏に響く誰かの声。同時に何かに呼応するようにして、激しい頭痛が起こる。

「ツ!? ぐつ……」

「おいどうした! しつかりしろ!」

『君は幸福だ。そしてこの都市で過ごして来た』

『心配するな、君は幸福にここで過ごして来た』

『安心しろ。君は疑いようもなく、幸福である』

反復される言葉ことばコトバ。私は幸福で幸福都市で過ごして来て心配も何もなく幸福に過ごして安心して私は私として生きてきて………幸福? 幸福幸福幸福幸福

幸福幸福幸福幸福今の私は幸福?

本当の私はどこだ?

与えてくれた『N様』。

では今の私は幸福か?

違う、奪われたのだ。

誰に? 『N様』に。

………ふざけるなよ。

この気持ちは幸福か?

違う、これは怒りだ。

この感情を向ける先。

私は憎い、『N』が。

この感情が、私のものであるなら。一年前から抱き始めた、この憎悪の感情が私だけのものなら。いや、そうしなければならぬ。誰かに与えられるだけの人生は御免だ、それは私じゃない。数十年にわたる私のなんてことない記憶がもしも幸福というなら、私は自らそのクソツたれな幸福を手放し、断ち切るのだ。

幸福都市でも、誰かの不幸の上に私たちの幸福がなりたっている、教えられたではないか。それも『N』直轄の幸福維持権を持たされた者たちに、この身をもつてして。

「……………」

私は反射的に、ここに来てからの目に見える変化である右手を見ていた。規則正しく機械音を鳴らすソレは、幸福都市ではなくアウトサイドの象徴。私はその右手を握り、考える。

そうだ……そんな人を不幸にする『N』が与える幸福なぞクソ食らえ、私の人生に口を出すな。私の幸福は自分で勝ち取る、『N』の呪縛から逃れて。幸福都市のように日常的に少数を犠牲にする幸福ではなく、少数も掬い取る幸福を。その覚悟が、右手に現れているようで、

『君は、私が決める』

脳裏に響いたその声に私は、

「……………ふざけるなよ」

そんなものは全て壊す。何が幸福だ。与えられるだけの幸福のどこに価値がある。私を縛る枷があるというのなら、全て壊してやる。もう一度右手を強く握りしめ、強い意志を持ってレオンに向かつて……………いや、世界に向かつて吼える

「私は、私だ。何者でもない、私がここにいることがその証明。正体不明？ 結構だ、なんなら私のわからないままの名前の代わりにしてやるとも」

もし仮に、今この私を形どるすべてが『N』による仮初なら、それを今から全て喰ってやる。そしてここで、私は変わる。今あるすべてが、私の全て。過去を受け入れ、今を進むための……………わからないことだけがわかった、それだけで今はいいのだから。

正体不明を受け入れ、私は生きていく。私は確信する。今この瞬間、私はまさに、幸福であると。流されるだけではなく、自分で切り開いていこうとすることが、こんなにも幸福と感じる。私は初めてアウトサイドへきてから、血なまぐさいこれまでのなかで初めての、生の実感を得た。初めて、自分の意思で……………生きている気がした。

だから、

「私は……………何者でもない、私だ」

ただ一言だけ呟く、誰に言うまでもなく。そして訪れる沈黙、続くように静寂。その

緊迫した世界で先に口を開いたのは、

「……はあ。やっぱりか」

レオンは頭を掻きむしり、そうつぶやいた。私が一年前にした覚悟を更に強めていたところで、レオンはその様子をずっと見ていたのか、何か言いたげに下を向いて溜息を吐いていた。

「いやな、わかってたんだよ。お前が彼の人を憎んでいることも、今もそのことだけを抱えて生きてるつてのもの」

レオンは先程までの殺気を纏った様子ではなく、会って間もない記憶の中での彼に戻っていた。

「ただ、それでも確認しなきゃいけないんだよ。ジジイに言われた手前、断ることもいい加減なことでもできないからな。それにもしもがあつてからじゃ遅い、ましてや来るべき日の任務である幸福都市に乗り込んでからじゃ、な」

「だから、聞きたかった。お前の口から、その覚悟を。生まれである幸福都市に反旗を翻す、その意思を。」

試されていた。ただその言葉が私の頭には率直に伝わっていた。彼の行動は任務に当たる隊長として、決して避けることができなかつたものだったのだろう。なら私がするべきことは、言うべきことは

「悪かった、信用に足りえる奴ではなくて。だが、私は一年前のあの日から、アウトサイドに身を落としたその日から……この身は全てアウトサイドのためにある。それだけは、お前に伝えて起きたい」

着飾った言葉はいらぬ、取り繕わなくていい。どうせ私に彼に語るだけの半生も、記憶も、何もありはしないのだから。だから、だからこそ。行動で、この身をもって示していくしかないのだ。アウトサイドの、一員として。

「……『解除』。悪かったな、突然」

レオンはほんの少し考えた様子を見せ、すぐに私の拘束を解除する言葉を放った。すぐさま全身に絡みついていた違和感が消え、自由の身になる。

「俺もさ、隊長だなんて言ってるけど所詮一人の人間さ。それ以上でもそれ以下でもない。だからこそ安全策を取っちまった。もしもつと俺に力があつたなら——」

「何言ってる」

思わず反射的に口から言葉が出ていたが、その通りだ。何を言ってるんだレオンは。彼は私に気が付かせてくれたのだ、自らの行動を伴って。それでいて真剣に向かい合っているのだ、私のも、彼が呼ぶジジイとやらにも。まるで自身、がアウトサイドの歯車である自覚をもっているかのように。

「レオンは……いや、隊長は疑いようもないくらい、私たちの上に立つべき人間だ」

これはきつと、気が付かせてくれたレオンに対する感謝も含んでいた。私の存在を、これからの生き方を気が付かせてくれたことへの感謝。

するとレオンは豆鉄砲を食らった鳩のように呆けた顔をしたかと思うと、今度は少し照れくさそうに下を向いて頭を掻きむしった。そして、

「なんか恥ずかしいけどよ、短い間かもしれないがよろしくな?」

「ああ、隊長」

私とレオンはお互いに声をかけ合い、そして手を握り合った。なんてことないことだが、初めてお互いに認め合った瞬間でもあった。そこで初めて気が付いたが、ここまでもしレオンの言っていた親睦会の意図であるなら。私をここまで連れてきたのも、邪魔が入らないように残りの二人を眠らせていたのも、ここまで計算ずくの行動なら……「……なんだ? 俺の顔になんかついてるかあ?」

目の前で屈託のない笑みと、その上にハテナを浮かべるレオン。……考えすぎ、か。「なんでもない、少し吐瀉物がついてるだけだ」

「え、マジ?」

「あと、ちゃんと来るべき日の任務のことは説明しろ。アルコールを入れる前に」

「……それは、ご愛嬌ってヤツ?」

「……はあ」

むしろ、計算がないからこそその結果かもしれない。彼はただ心配してただけかもしれない。だからこそ私が考えるきっかけを得ただけかもしれない。だからこそ……いや、それこそ考えすぎか。全く、底が知れない男だ。

私は、少しだけ笑ってしまった。

「くおらー！ 二人ともどこいってん……ひつく」

「……げふ」

私とレオンが戻るやいなや、投げつけられたのは罵声であった。かたやもう一人は黙々とグラスを煽っている。傍に乱雑に投げ捨てられているビンたちが、嫌という程にこの状況の説明となっていた。

「あー、なんだ。二人とも仲が良いのは——」

「うるしえー！ はよお、飲まんか！」

「……飲め」

「な、なにを——うぶっ!？」

レオンが眼鏡の男に組みつかれたと認識した瞬間、ゴリラがレオンに口に一升瓶をぶちこんでいた。ご丁寧に鼻まで塞ぎながら。

この状態では如何にレオンといえども逃げられないようで、一升瓶の中身が恐ろしい

勢いで減っていつてる。なんというか、ご愁傷さまとだけ心の中で思っておいた。

「も、もう無理……」

およそ数分も経たぬ間に満タン入っていた一升瓶が空になり、空瓶と一緒にレオンは放り出された。レオンの顔は見るまでもなく、グロッキーである。

すると二人の猟犬よっぱらいは満足できていないのか、こちらへと怪しげな視線を送ってきた。

「へへえ、次はお前だ根暗〜!」

「……飲め」

まあ、今くらいはこのくだらない茶番にも付き合つてやろう。そう思って、私は差し出された酒を一気に呷った。